ISSN 2433-5851

甲南リベラリズムの源流を求めて
――平生釟三郎の建学精神と地域開発をめぐって――

甲南大学総合研究所
叢書　132

甲南リベラリズムの源流を求めて
――平生釟三郎の建学精神と地域開発をめぐって――

甲南大学総合研究所

叢書 132

目　次

序文

中　島　俊　郎（ 1 ）

人間　平生釟三郎

――パブリック・モラリストとして――

安　西　敏　三（ 3 ）

文化遺産としての向日庵

――過去を見つめ、未来を見すえる「開かれた場」――

中　島　俊　郎（25）

序　　文

中　島　俊　郎

甲南大学を中核にすえて郊外文化とリベラリズムの展開を考察していこうとする、私たちの研究チームは、研究成果として講演録をともに提示することにした。学会誌に掲載される専門的な論文とはちがい、講演は広く市民に開かれた形態をとる。両講演とも一般の聴衆を対象に啓蒙を主眼とするためにより平易なかたちで説かれている。学際的な研究を標榜する総合研究所の探求は、各専門分野を横断するゆえ、多くの知見が必要とされ、ともすれば難解に陥りやすい。そうした弊を避けるため、講演録を研究成果としてここに掲げるのは、当を得ているのではないかと考える。

両講演が対象としたのは、甲南学園の中心的な人物である。まず平生釟三郎は学園の創設者であり、理事長、校長をつとめ文字通り甲南の精神的支柱であったが、もう一方、壽岳文章は平生釟三郎の教学精神に深く共鳴し、英文科を創設し、文学部長、図書館長をつとめた。甲南学園につどった人々にその名前が深く記憶に刻まれているのは、何よりも「学園歌」の作詞者として、である。

安西敏三は、2016年６月11日に『平生釟三郎生誕150周年記念シンポジウム』の一環として、「人間　平生釟三郎―パブリック・モラリストとして―」と題して講演した。ここで言う「モラリスト」とは、道徳家、道義者などという狭義な意味ではなく、むしろ16世紀から18世紀にフランス思想界を特徴づけた、人間の生き方を考察し、人間性を探求したモンテニュー、パスカル、ラ・ロシュフーコーなどの思想的実践ときわめて親和性をもっている。あるいは経世済民家と称して良いかもしれない。平安時代から明治にかけての「公」を代表するかにみえる武士道という概念をも射程にいれて、平生釟三郎という人間の全体像をみすえ、実行した数々の営為とその本質を指摘し、政治、経済、社会、教育という場でそうした実践がいかなる意味をもったかを追究している。

壽岳文章は20年近く甲南大学に奉職したが、向日市で自らの居宅を「向日庵」と称し、環境保存から平和運動まで、旺盛な文筆活動とともに実践していった。翻訳家である妻、しづ、国語学者にして町家の重要性を早くから説いた長女、章子、国際的な天文学者であった長男、潤といった壽岳家は、まさに文章を中心に開いた文化そのものと言えよう。鶴見俊輔はこうした向日庵における壽岳文章の活動を「家庭を基盤にした市民活動」と総括した。向日庵保存を求めるNPO 設立を記念して、中島俊郎は2017年 4 月30日に「文化遺産としての向日庵―過去を見つめ、未来を見すえる『開かれた場』―」と題して講演した。昭和初期から平成にかけて行われた郊外都市の、国際交流も含めた文化活動の一端を明示できたかに思う。

ここに提示された両論文は、こうした講演録をもとに、大幅に資料文献を追加し、より全体像を明確にしようとしたものである。その点、難解になったのではと恐れるが、広くご批判、ご叱正を賜り、より完全なものにしていきたいと切に願っている。

人間　平生釟三郎

――パブリック・モラリストとして――

安　西　敏　三

一　は　じ　め　に

平生釟三郎は昭和八年、即ち一九三三年二月四日の日記に、自身の川崎造船所社長に就任に関する『大阪朝日新聞』の推測的記事を引用して、「余の心事の一部を解するものといふべきか」と満足の意を汲むことができる感想を認(したた)めている。平生が目にした記事は次のようなものであった。即ち平生が社長に就任するのは、「営利会社の社長」ではなく「奉仕事業」としてであって、川崎造船の興廃が「神戸市の盛衰、一万三千余人の休戚(きゅうせき)、国防機関の消長」に関係する「公共的事業」として位置づけられており、その意味では甲南学園や甲南病院を経営するのと同一であり、無報酬であることが条件である。ロータリー・クラブの一員として、「各自が其職業、其事業を通じて社会に service をなさんとするもの」、つまり「余が川崎造船所の仕事に干与することは Rotary Club の精神を実現するもの」であり、それは甲南学園、甲南病院、兵庫県教育会、自由通商協会の仕事に関与することと矛盾も抵触もしない、との確信を持つものである。かく読まれるべく記されているのであった（⑬599）[1]。

大阪朝日が指摘しているような平生の公共的事業への参与は、平生の「公」を知る上で重要である。平生は旧制甲南高等学校を創設するにあたっても、「本校は決して有志者の専有物にあらず、理事の私有物にあらず、教員の独占物にあらず」と述べ、それが「真の意味に於ける公有」であって「我々本校に干与する同志の人々が我々が懐抱する新教育主義を実顕せしめんとする公の機関」であると断言しているのである。志を同じくする人々からなる「公の機関」である以上、その盛衰興亡は「一に我々一同の和衷と熱誠如何」にある。しか

も「和衷協同の精神を発揮せんには共同の目的に向かって勇往邁進するの決心を要するなり」として、「個人が個人の利害を先にし共同の目的を後にするに生ずる」愚かさは避けなければならない。そしてどこまでも「己の利害を捨て公の目的に進まん」決心を賛同者に求め、「各人の胸襟を開き常に光風霽月の心を以て互いに誘掖扶助、以て共同の目的を達するに幾何ならんか」と宣言するのである（⑤220）。「公」が天下国家と結びつくことなく奉仕から発するパブリックを意味していることは注意されて良い。それは昭和十一1936年に揮毫した「共働互助」、その精神の具現化とも言える灘購買組合創設（1921年５月）、さらに「栴檀は双葉より芳し」即ち大成する人間は幼少の時から優れた香気を放つ、にその名の由来を持つ「拾芳会」なる育英組織を設けたこと（1921年４月）[2]においても確認できよう。そうして平生の「公」はさらに世界に向けても発せられる。

「世界の平和は世界の民族が平和にして、幸福なる群集生活は国内といへども共存共栄の主義に依らざるべからず」と述べ、これは「奉仕の観念」に頼らざるを得ないとして、「各国民族が他人の利益を犠牲にして自国を利益せんとする個人主義的観念を以て行動」する保護貿易ではなく、自己を超えての奉仕、最善の奉仕は最大の利益を説くロータリー精神に則る自由通商こそが共存共栄よろしく「真に世界平和」をもたらすものと論じているからである（⑬537－38）。ロータリー精神に「公」を見出すことは容易である。

二　「公」と武士道

なぜ平生は「公」をしばしば説くのであろうか。それには武士道への深い思い入れがある。学校移籍のため矢野二郎校長の尽力を知ることなく養子縁組を学資の為に軽々に決めた粗忽に後悔の念堪えず、実父田中時言に対しては申し訳ないとの悔恨の念に心乱れ書簡を認めたところ、実父から矢野校長の厚意ある努力によって、従前の如く学資支給の継続が叶えられたことは「実に喜ばしき事」であり、たとえ養子になったとしても、「養家に厄介」をかけること少きは、「真に結構なことである」との返事に一言も遺憾の意を認めていないことに、「実に古武士の魂は如此きものかと、余は感嘆措く能はざりしなり。父

のこの行動こそ余が、他日、世に処するに於いて、最も尊ぶべき指導精神を与へたるものなり」との平生の後年の回想において、それは明らかである（自65－66）。但しこの平生の叙述のみでは武士道を叩き込まれた具体的内容を知ることはできない。それには平生の出自と無縁ではない幼少時の父親体験が大いに預かって大であった。取り分け農家から没落していたとはいえ加納藩用人をも勤めた過去を持つ名門武家へ養子としてはいた実父の存在が重要である。

実父田中時言は美濃厚見郡高田村の豪宕不羈（ごうとうふき）にして機略に富む武士的精神を有すると平生が認識している庄屋岩間専十郎の三男としてこの世の生を享けた。時言の農作業を嫌い武士たらんとする仕種（しぐさ）が周囲には狂気に映ったこと、言うまでもない。しかし武士的人物たる祖父の意にはむしろ叶うものであり、専十郎は時言に学問と武術を学ばせたのであった。そこへ田中家の養子の話が飛び込んできたのである。養子先の田中家は、釟三郎の命名者にして曾祖父たる熊造が藩主永井家の家臣の中でも旧家であった御家の再興を果たし、御用人の地位にまで上り詰めた家柄であった。ところが嗣子要助は剣道馬術などを江戸留学によって身に付けるも、大量の飲酒が祟って3歳の子を遺して28歳の若さでこの世を去った。遺児たる平生の母松もまた酒に呑まれる子であったため、家名を存続すべく熊造の乾坤一擲の冒険、即ち大酒による七転八倒の苦しみを体験させられ、のち酒の香りすら好まなくなり、田中家の相続人として立ち直らせたところで、養子の話が持ち上がったのである。泰平の御代には武士の形骸こそ残れ、武士の魂を持った若侍は稀であった。農家の出であるとも武士の魂を有するものこそ武門の家督を継ぐに相応しいと遠謀ある熊造は考え、物色した結果が時言の入籍話であったのである。岩間専十郎は天にも昇る心地で承諾し、時言も「我志なれり」と17歳にして武門田中家に婿入りを果たしたのであった。士分の者に会えば土下座を成さざるを得ない百姓の子を、礼を以て迎えた熊造の果断は、「実に礼賛に値するものである」が、それだけに実父が「一生を通じて如何なる境涯に立つも、武士的精神を以て終始せしも故ありといふべし」と釟三郎も断言するのに憚ることはなかった。時言の武者修行は在り来たりの剣術、弓術、槍術ではなく、砲銃術であったことは、その慧眼もさることながら、「百姓の倅より、一躍武士となりたる異例なる境遇をして光彩」あら

しめ、「最も賢明なる出発というべきか」という感を釟三郎に抱かせるものであり、戊辰の役にて征東軍の砲術長として大砲二門を率いることになるまでになっていたのである（自 5－12）。

こうした経緯が時言を武士の魂の具現者たらしめ、「汝は武士の子に非ずや。だまし打ちは武士が最も恥とする処なるに、今日の行為は、全く田中の家名及び父の顔に泥を塗るものにして、田中の家の子として生かしおくべき事は祖先に対し申訳なければ、直ちに打ち首とすべし」との次兄銃次郎への言葉、また小豆粥を常食としていることを農夫に知られることを家門の恥辱として、小豆の混入を留めないまで汚物の腐敗を待つ態度となって現れるのである。武門としての名誉に神経を使う時言であった（自 5－7）。

むろん武士道と雖も一律ではない。武士という具体的な集団の名称から離れてある種の行動様式を持つべき理想的人間類型へと発展していったところに武士道が規範意識として存在し続けてきた理由がある[(3)]。特に士族層のまとまりがほぼ消滅したが故に観念的に美化された明治三十年代以降の武士道ブームは重要ではあるが、平生の場合、それに留まるものではない。平生が生を享けた徳川末期は元亀・天正時代、即ち戦国状況の再来とみなされ、それまで活躍の場を持ち得ず貧困にあえいでいた下級武士層に、それこそ武者震いをさせる時期でもあった。天下泰平の御代にあって衣食住を始め箸一本も買い調えざるを得ない状況になり、損得勘定に生きることを余儀なくされていた武士達にとって[(4)]（荻生徂徠『政談』1726年頃稿）、「花は桜木人は武士」とは遠い過去のものとなり、武士の行状が世の中の鑑となり、人の善悪邪正を糾明し、賞罰を執る職分として奢らず諂わず、無欲にして身命を国家に投げ打ち忠を尽くして孝を立つべき存在が、今や武士としての気象も曲がり狂い、武備の覚悟もなく、公務の用意もない有様と化していたのである。「昔は武士の難渋困窮などは堪へて言はざる事、侍は食はずとも高楊枝とか申す如く、御慈悲・御憐憫などいふ事、たとひ死すとも申すまじき事に忌み嫌ひしを、今は沢山にいひ立つる事になりぬ。浅ましき事ならずや。かやうなもの国家の用に立つべきにもあらず」との現状と化し、しかもこれらの「不始末者が先に立つ風情なり」でさえあったのである[(5)]（武陽隠士『世事見聞録』1813年序）。

利勘が物を言う時代に「貧は士の常、尽忠報国」を旨とする武士が実は「買い物の棒先を切る」を定式（じょうしき）の法とする「金箔付の偽君子」でもあったろう（福澤諭吉『学問のすゝめ』十一編、1874年）[6]。そうであればこそ「武士は喰はねど高楊枝」は現実を映し出す表現ではあり得ても教ではなく、「恒の産なくして恒の心ある者は唯だ士のみ能（よ）くすと為すと。此の一句にて士道を悟るべし」と講じて、「諺に云ふ、武士は喰はねど高楊枝と、亦此の意なり」と一旦は武士の教訓としてそれを認めるが、「然れども是れ武士の教と云ふには非ず」として「武士の有様なり」と、平生も「人間の魂が人間を作る」として短期間に偉材を輩出させた師弟同行の教育理念に共鳴する[7]吉田松陰は断言する。何故か？「武士と云ふ者は、飢ゑても寒（こご）えても、吾が持前の心懸を失はぬ程の事は申すまでもなきことにて、教と云ふには足らぬことなり。特に本邦にては武義を以て本とし、中世以来武門武士と唱へ、専ら武道武義を励むことなれば、是れ程の事は三歳の小児も弁へ知ること」であるから、「今更教と云ふに及ばぬことなり」と松陰はいうのである。そうであれば「吾れ願はくは諸君と志を励まし、士道を講究し、恒心を錬磨し、其の武道武義をして武門武士の名に負くことなからしめば、滅死すと雖も万々遺憾あることなし。豈に愉快の甚しきに非ずや」ということになる。志・士道・恒心・武道・武義に励むことこそが武士の教として要求されるという訳である[8]（吉田松陰『講孟余話』1855年序）。

然しながら平生は、「武士は喰はねど高楊枝」は「独立せる人間は斯くあるべしと武士道が武士に向かって要求せる slogan」であると、そこに規範意識を見い出し、「明治大帝は其教育勅語に於いて我々に向かって一旦緩急あるときは義勇公に奉ずべしと仰せられたのであります」と述べ、「武士的精神の欠如たるものが如何にして義勇公に奉ずることができましょう」と教育勅語における「義勇公に奉ず」を武士道、日中戦争後からは、むしろ日本精神とか大和（やまと）魂と結び付けて解釈する（1939年5月1日）。「喰はねど高楊枝の motto」が常日頃服膺（ふくよう）されていたからこそ「三百年間享有せる生活の保証」を僅かな秩禄公債に換へて平民に成り下がった数百万の武士は、その処置に対し不平不満を唱へることなく「悲惨なる下層生活に入りたるもの大部分」ではあったが、「一人として政府に向かって救済を求めたるものなかりし」であった。そうして「武

士道に代はるべきものは教育勅語の精神であります」と平生は断定し、「今日国民が政府に縋(すがり)て救済を得んとするは全く教育勅語の精神が涵養せられざるに依るといへども誣言(ふげん)にあらず」とまで言う。教育勅語の奉読は「恰も空念仏の如き観ある」状況を呈していたからこその強調でもあるが、平生にとって教育勅語は武士道の現代版でもあったのである（⑬429－30）。

平生が主張しているのは、かつての武士に倣って生活苦を物ともせず、自助努力をし、義勇公に奉ぜよ、ということである。ただそれだけであるならば、国難時代の窮乏生活に耐える精神の武士道に名を借りた鼓吹のようにも映る。しかし功なり名を遂げた自らの経験を振り返って、特に有閑有産階級の相続税を重くして遺産の平等分配を主張し、格差少なき社会を持論とする平生は、彼らにこそ自助努力を呼び掛け、尚且つ奉仕による「公」を説くのである（⑬430）。平生はスマイルズ『自助論』（1859年）の名言 “God saves those who help themselves.”[9]（天は自ら助くる者を助く）を肝に銘じ、自ら働き自ら活きることを武士道の一つたる名誉を伴う独立精神として説くのである（④361）。武士道と自助努力、しこうして「公」に尽くす、というのが平生に在っては重要なのである。

三　武士道とスポーツマンシップ

平生は武士道を説くも、その復活は無理であるとの現状認識も有していた。そしてそれに代位する勅語的精神論に加えて、より実現可能な具体論を説く。スポーツマンシップと武士道との同一性の認識からくるスポーツの奨励が即ちそれである。それは平生が事あるごとに例として挙げている英国体験による。即ち大正十四1925年１月29日付けの在英日誌に認めている「英国に於けるスポーツマンシップは日本に於ける武士道と同一にして、正を踏んで怖れず、義に伏して屈せず、廉恥を尊び、犠牲を敢へてするの行程にして、この精神は個人間にも又国家に対しても其光輝を発し、其真髄を表するものなり」において明確であり（⑥511）、しばしば挙げる具体的事例によっても知ることができる。「欧州戦争当時オクスフホードの学生約5000人中4000人前後が自ら志願して戦線」に赴き、多数の戦死者を出し、「各 college の chapel の壁には多数の氏名」

が刻まれ、しかも「Oxford や Cambridge の学生は大多数権門富豪の子弟である」という事実を認識して、「かかる愛国の熱情が上流社会の青年間に流離（りゅうり）たるは其原因や如何」と自問し、これに比するに「我国の上流階級」の子弟にオックスブリッジの学生の如き「愛国の熱情が漲しつつあるや」と疑問を投じ、「日清日露の両戦役に於いて上流社会の子弟は最前線に現はるるを好まず、後方勤務又は師団司令部附として其身の安全を図りしもの多数なりしと聞く、或は之が実情なるやも知れず」として、「英国の学生が全然反対なる主因」を、家庭が健全にして学校との連携を密にする家庭教育が完全であること、及び「英国の国技ともいふべき Rugby football を以て心身を鍛錬」し「所謂 sportsmanship が養成せられある」ことの二点に求めている（⑬397－98）。

日英比較を通じて「我国の清華ともいふべき武士道は今や散り果てゝ浪花節の語り草として其遺影を残すのみ」との感慨を持ち、「世は滔々として物質主義、功利主義に隋しつつ行く現状である」との認識を示し、「比較的物質に不自由なき家庭の子弟」が「緊張味を欠き、殊に剛健なる気風に乏しきことは著しき事実である」と指摘し、そうであるが故に「一層体操、軍事教練、武道を奨励し厳格に教練すると共に大いに sports を奨励して以て心身の鍛錬を盛んならしめざるべからず」と主張する。そうすれば「国難に際し義勇公に奉ずる熱誠を以て進んで戦線に赴くものがオクスフホード大学生の如き多数なる」こと疑ないと確信するのである。そうして「若し将来日本国の中堅たるべき良家の子弟にして此の如き意気なく父祖の遺産に頼りて浮薄なる享楽主義に隋し遊惰と安逸に耽るにあらざれば、唯打算と功利のみに熱中し国家の盛衰を顧みず自己浮身の術のみを講ずるに至らんか、我国は自滅の外なし」とまで言うのである（⑬397－98）。

スポーツが武士道と同じスポーツマンシップを涵養するというが、取り分け平生はラグビー・フットボールこそが、それに相応しいと結論づけている点、注意されたい。「欧州戦争の際、各大学の学生の多数が自ら進んで volunteers として出陣して多数が屍を仏国の戦場に曝したるもの」がラグビーに由来していると認識しているからである（⑬524）。

何故ラグビーなのであろうか？　ラグビーは第一に fair play（衡平）、第二に

honesty（正直）、第三に courage（勇敢）、第四に cooperation（協同動作）という四大徳性を涵養するのに最も適したものであり、絶対に trick（策略）や cunning（狡猾）といった権謀術数を許すことなく、審判員も偏頗の意志を有することなく、監視は完全であり、如何に狡猾な選手でも策略をめぐらす余地がない。しかも勝敗を争う故、激戦奮闘を要し、タックルの様に最も勇敢にして堂々たるダッシュを要し、15人のメンバーは終始共同一致して各自の役割を完全に決行せざるを得ない。一人でもその役割を怠るならば、協同一致の動作を不可欠としているチーム相手に勝ち目はない。かくてラグビーは勇敢にして愛国的精神の基礎を造る。国技であるラグビーに由来する英国魂（ジョンブル）は神聖にして公平無私なのであって、日本人のように私欲のために陥穽するも辞しない利己心強き民族には至高好適な助言を与えるものと言うのである（⑩221－22）。

武士道とスポーツマンシップとの同一性は、第一高等学校に国家よりも国際感覚を持った個人を主眼とする教養教育、その意味での人格教育をもたらしたと言われる新渡戸稲造[10]、その *Bushido A Soul of Japan*（1899）（『武士道』桜井訳1908年）に援用されているトマス・ヒューズ『トム・ブラウンの学校生活』（1857年）に描かれているラグビー校の学園生活の主題の一節と読める文武の徳の根本とした「格闘におけるフェアプレー」（Fair play in fight!）が第一義的にある[11]。その精神は遠い昔に武芸の家に生まれたことを誇示する者同士が一定の手続きによってフェアに行う命をかけた厳粛な遊戯と見なされるものであって、「公家の習」との対照における源平合戦以前の「弓矢とる身の習ひ」ないし「兵（つわもの）の道」あるいは「武者の道」であった。それは戦闘の遊戯性を内包するものではあるが、軍使交換による日時・場所の決定、戦争開始直前の挨拶、あるいは大将相互の名乗り、矢合わせ（鏑矢（かぶらや））、そうして戦が始まると遠矢から馬で接近してのすれ違い様の狙い打ち、乱戦となって矢が尽きれば刀戦、はたまたは騎乗から組打を経て首級（しゅきゅう）を挙げ名乗（なのり）を上げる、という手続きを経るものである。これは無秩序・無規範な略奪的暴力から区別された武士の自己陶冶（self-discipline）の一基礎をなしたものであるという[12]。

もちろん現実には平生の実父が尤も嫌悪した騙し打も頻繁であったろう。特に元軍との戦争以降は家を代表する者としての個人主義的戦から集団戦、さら

には戦闘者身分として生きる以上は勝つことが第一であり続けたことから夜討ち水攻めなど、アンフェアな手段も種々行使された。「大衆、夜討の義尤も然るべし、軍は勝に乗るに如かず」[13]（『源平盛衰記』南北朝頃成稿）である。あるいは近世にあっても「兵は詭道なり。時の勢によりては、わが身方に対しても、いつわりて表裏を行ひ、人の功をうばひ、或は、国をみだして、逆にしてとるも、兵術においては害なし。是日本の武道なり。もろこしの道を以ては、日本の武道は行ひがたし。日本は武国なれば、もろこしの、正直にして手ぬるき風俗にては、功を成しがたくして、日本の風俗にはあらず。ひずかしくすゝどくて、人のなしたる功名をもうばひて、わが功名とし、人の取りたる首をもうばひて、わが勇とするが、日本の武道なりなどいひて、秘密して人にをしふ」[14]（貝原益軒『武訓』1716年）との見解もあったのである。

むろん天下泰平となるや首級を挙げる戦闘者というよりは行政官僚としての立場を要求される武士には、戦場におけるエートスよりも儒教的徳目を加味した「武士道」、中でも士大夫としての「士道」的側面が唱えられるに至ってもいる。「凡そ士の職と云は、其身を顧み、主人を得て奉公の忠を尽くし、朋輩に交て信を厚くし、身の独りを慎みて義を専とするにあり」[15]（山鹿素行『山鹿語類』寛文五年成稿）。然しながら行政官僚化する以前にあっても不公平な騙し討を「非義」として、対等の条件の下での正々堂々とした戦闘を尊ぶ規範意識が消え去っていたわけではない。それは例えば秀吉の小田原攻略の際のエピソードに窺うことができる。

北国の兵士に強弓の武士がおり、城兵がその矢に当って死傷する者が多く、小田原城中から「伝へ聞く鎮西八郎為朝、能登守教経も、この弓勢には優らじ。迚もの事に其面を見ん。今一矢と訇りける」、と強弓を引く者に声がかかった。秀吉は「さらば射よ」とその武士に命じ、「小高き所に立ち顕れ、大弓多矢束満引する所」を北条方の武士が「城上の女垣銃眼より、二つ玉の鉄砲にてあへなく」その強弓の武士を打ち殺す事態となった。そこで秀吉は「敵は戦の法を知らざるや」と大いに激怒して「射書を以て譴責」したところ氏政は、「これを知らず非義の至りなり」として、「鉄砲を放ちたる者を斬って、その首を秀吉へ送られけり」と相成った[16]（熊沢淡庵『武将感状記』1716年）。この

逸話を読めば、戦国期にあっても武者の規範意識が全く途絶えていないことを知ることができよう。

また「兵は名を以て尤も先と為す。何ぞ若干の財物を虜領せしめ、若干の親類を殺害せしめて其の敵に媚ぶべき。今すべからく与に合力せらるべし。是非を定めむとす」(『将門記』平安中期成稿)[17]との己を超えての「与に合力」する奉仕に通ずる結果的考慮を度外視した「名」を挙げんが為の敢闘精神は、強烈な自尊と自負の気概が「只一人敵の中へ打入りたり共、証人なき所にて死したらば、なにともなき徒事犬死とは左様の事也、御方のつゞきたらん時に、先を懸け命を捨てゝこそ、我も人も高名にて、子孫に勲功もあらんずれ、闇討に射殺されては、且は嗚呼の事」(『源平盛衰記』[18])との「君の馬前で討死」という最善の奉仕が最大の利益に通ずる結果本位の利益化と共に、武士道の底流に生き続けていたと思われる[19]。勝敗の結果云々があったとしてもフェアであることが武者として第一の規範であり、「恥を知る」武士の集団の方に「命あっての物種」と思う集団より価値的に重んぜられているのである。確かに武士道は武士らしさを擬装する演技と化していたかもしれないが[20]、そうであっても規範意識としては生きていたのである。

平生がラグビー精神あるいはスポーツマンシップに武士道と共通のものを見出したのも分かるというものである。勝敗の結果云々というよりはフェアであることが第一なのである。

四　「公」と政治教育

ところで一九三〇年代前半は橋本欣五郎など桜会の一部将校と大川周明らが軍部クーデターによる宇垣内閣の樹立をはからんとした三月事件（1931年３月)、関東軍参謀ら満州占領を企て奉天郊外柳条湖の満鉄線路を爆破し、関東軍司令官本庄繁が中国軍の仕業として中国軍に総攻撃を命令して勃発した満州事変(1931年９月18日)、甲南にも講演に出向いた平生と昵懇の前蔵相井上準之助が血盟団によって射殺された事件（1932年２月９日)、満州国建国宣言（1932年３月１日)、海軍青年将校と陸軍士官学校生徒らが首相官邸を襲い、犬養首相を射殺した五・一五事件（1932年５月15日)、国際連盟脱退（1933年３月27日)、

大日本生産党員らによるクーデター計画が発覚された神兵隊事件（1933年７月11日）などが起き、国難が喧伝され、特に憲政が危機状況下に陥り、日本史上最大のクーデター事件である二・二六事件（1936年２月26日）が起きる諸要因が見られる時期でもあった。

平生はこの時、憲政が政党政治によって担保されることを論じ、憲法を制定し議会を設けた以上は、政党政治を忌避することは自体矛盾であると指摘する。「憲法は明治大帝が維新直後に下し給ひたる五条の御誓文に胚胎して制定せられたるものにして、之を否認するが如きは明治天皇の御懿旨（ごいし）に反（そむ）くものといふべし」（⑬392－93）であるからである。このように述べて、引き続き平生は、政党政治の不信は「政党が腐敗し党人が人格的に堕落せる」が為であり、そうした「堕落せる代議士の多数が議政壇上」に登場する結果を見るのは「選挙民が憲政の何物なるを理解せざるが為めである。何故に理解せざるやといふに、国民の大多数は小学教育を受けたるのみにして政治の何物なるかを理解するほどの知識を修受し居らざるなり」と、その要因が小学教育における政治的知識を得る時間的余裕がないことにあると断言する。小学課程で政治的知識を学ぶには余りにも時間が少ない。漢字習得のために時間が割けないのである。点字学習を見ればわかるように、漢字を廃止すれば国語学習は三年ないし三年半ですむ。そうして述べる「政治腐敗の主因が此の点にあるを気付かずして憲法政治を中止して独裁政治を歓迎せんとするが如きは本末誤る俗論である。選挙の何物なるやを知らしめずして普通選挙制度を布きたる如きは思はざるの甚しきものなり」（⑬393）と。

平生にあっては専制政治、貴族政治の遺物たる漢字学習の時間を削減して政治教育に充て、「公」的意識の涵養を図ることが憲政の常道たる政党政治を健全たらしめるというのである。真に「Democracy を政治の要諦なりと叫ぶ人が専制政治の遺物を眼前に見つつ平然たるが如きは無頓着の極みである」のである。「如何に選挙法を改正するも、如何なる処罰令を設くるも、選挙人をして憲法政治に関する知識を有せしめざる以上、決してこの弊害を除去する能はざるべし」ということである。平生は尚付け加えて外国のお伽噺を紹介する。ある人が動物園より帰り、そこで見たものは小鳥、小魚、小さな虫、顕微鏡でな

ければ見えないバクテリアのことを談じたのであるが、これを聴いた人が「しかし象は如何であった」と問うたところ、その人は目を見張りて「象は見落としたり」と。「今日の我国民中の有識者もこの動物園を遊覧せし人と同一なるの感を抱く」と。デモクラシーを論じ、立憲政治を実たらしめるのは、先ずは初等教育課程における政治教育なのである（⑬393）。

むろん既に平生は国民の精神が「封建時代の奴隷的気質」より「真の自治的立憲的たる」に到達して初めて政党政治の実現が可能であり、その為に教育上の方針を一変し、「強要的忠君愛国心」ではなく、国民が「自発的に忠君愛国の精神」を発揮できる精神の涵養が肝要であると普通選挙法案成立時の翌年、即ち大正十五1926年６月11日に論じている。「日本は日本国民の日本」であって日本の興亡盛衰に直接影響を受けるのは国民自身であるとの意義を真に理解させて初めて、国民が「日本国は自分の国家」であるとの観念を持ち、「義勇奉公の念」も自然に湧出（ゆうしゅつ）するという。「公」に主体的に参加する意識を育てるために政治教育は必要不可欠なのである。この視点から平生は強制的徴兵制を批判し、自発的愛国心による志願兵を常備軍とするのを良としたのである（⑧169）。

ところで非常時になると平生の立憲政治を担うべく初等教育における政治教育も、小国民教育のそれに近づく。昭和十三1938年６月29日の日記には教育として最も重要なのが小学教育として、持論の義務教育八年制を歴代の文部大臣が断行することが出来なかったことを指摘して、「単に形式的注入教育に堕し、人間を以て彼も人なり我も人なりと云ふが如き観念を以て教育をなし、個性を無視し天稟の知能を軽視して、人間は其顔の異なるが如く隠れたる頭脳の実質も一々異なれるを気付かずして、単に科学的知識の注入教授を以て教育の本旨に合致するものと誤認したることが今日の社会に於いて幾多の矛盾や邪説異想が跋扈するに至りし主因である。若し小学教育を完全にして国体と時勢を解せしむるようにせば、六拾余年の後に於いて国体明徴を高唱絶叫するの要あらんや」と考えるに至っているのである。ここに個性は国体と矛盾することはないことが宣言されてもいるが、しかし個性と親和性のある個人主義を西欧の思想の特徴として国体の名の下に全面的に否定したのが、平生が文部大臣時代になっ

た『国体の本義』であった。文部省による全国の学校・社会教化団体への20万部の配布は林銑十郎内閣時の５月31日である。その５日前には内閣に文教審議会が設置され、平生も委員に選ばれるが、これの目的は1941年10月31日まで戦時教育体制の基本を確立することに在った。

『国体の本義』の作成と無縁でない1935年11月以来開催されていた教学刷新評議会に平生は文部大臣として最初の挨拶をするが、そこには教育について世人が偏知的、あるいは形式的、さらには功利的であるとして、「真に日本人としての精神に徹底し、自主独立の識見力量ある人物の養成に欠くる所あり」との教育を非難し、また学問におけるマルクシズムや天皇機関説の問題、その他種々の問題が発生している傾向に関して次のように述べる。即ち「我国本来の教学の精神に鑑みて、十分なる考査考究を加へまして、大いに刷新の実を挙げるの必要あるもの」と考へ、そうした欠陥が起こった主たる原因を明治以降の外来文化の導入に当たり、「批判醇化の余裕を欠き、所謂外来文化の不消化に胚胎した所が最も大なるものであると信ずる」と。そうして日本の教学の根本を「我国体、日本精神にある」として、それは「教育に関する御勅語に昭示されて居る所であり」、その聖旨に基いて、「現下教学の実際状態に付いて仔細に研究を致し、その精神と内容の全般に亘って刷新を加へ、且つこれを基としまして、教育学問の各方面に向かって新たなる創造発展を図るべきであると信ずるのであります[21]」と述べるのであった。

天皇機関説に端を発する国体明徴問題は前内閣の引継ぎ問題とはいえ、『国体の本義』刊行に依る思想の正統化は、自由はいうまでもなく国体思想の名の下で個性を否定するものとなっていったことは否定できない[22]。そうして平生が提唱した義務教育八年制は平生の文相時代、一旦は実現をみることになっていたが、それが昭和十六1941年３月１日、国民学校令の公布で以て小学校を国民学校と改称し、教科を国民科、理数科、体錬科、芸能科に統合し、昭和十九年度より実施する予定になったのである。国民の育成が国体に叶う形でのそれであったことは言うまでもない。平生の初心ともいうべきデモクラシーの基本ともなる政治教育、「公」意識の養成の必要性は、「国体」の猛威の前では「少国民」の育成と化したが、しかし個性を生かし人格の完成を意味する個人の尊

厳を謳った戦後の教育基本法によって、むしろ唱えられることになるのであった[23]。

ところで日中戦争が勃発する前に非常時の思想統制が画策されている中、平生が甲南の校長として招聘したのが保々隆矣（たかし）であった。保々は「国家興隆の途は、世界的視野に立った国民教育の根本的刷新にある」[24]（碑文、1984年）として満州での教育改革に取り組み、満州教育専門学校において「自由と進取」をモットーに、英国の名門パブリックスクールであるイートン、ハローをモデルにした教育を行っていたといわれる[25]。甲南においては、しかしその果敢な取り組みが患ってか、１年を経ずして退職せざるを得なかった。そうして日中戦争の発端となった盧溝橋事件が勃発した７月７日の三日後に、やはり後に平生が三顧の礼で以て甲南高校に迎えた天野貞祐は『道理の感覚』を刊行したのであった。反道理のまかり通る目前の現実への批判の書と読めるがため、それは1939年３月15日には絶版を余儀なくされる。天野は知育の徳育性についての確固たる信念の持ち主であったがためか、やはり保々同様、志半ばにして甲南を去ることになるのであった。時代は平生を必要とし、その公的活動の一環としての平生の文部行政への関与は、平生の初心の教育理念に同意したかに見えた二人の校長の辞任という結果を見ることになったのである。

五　パブリック・モラリスト

さて平生がパブリック・モラリストとして公的活動に参加するのは、甲南高等学校の設立、甲南病院の創設、あるいは住吉村での議員をも含めた自治活動、灘購買組合理事、公的性格を帯びている川崎造船社長、などであるが、国家的レベルで本格的に関わるのは、ブラジル経済使節団長もさることながら、昭和十1935年12月３日、貴族院令第一条第四号による貴族院議員に勅選されたこと、二・二六事件後になった広田弘毅内閣の文部大臣に親任され、文部行政に関わったこと、広田内閣後には、文教審議会委員、北支経済委員会委員長、大政翼賛会総務、枢密顧問官など、第二次世界大戦時まで続くが、その活動を一貫して支えている精神は滅私奉公のそれである。功なり名を遂げた自負心、あるいは「士は己を知る者の為に死し、女は己をよろこぶ者のために容（かたち）づくる」（司馬

遷『史記』巻86、刺客列伝）という古代中国以来の経験智にあるように、己を愛する男の為に女が美しくありたいと望むように、男は目をかけてくれる主人の為には死地にも赴く[26]、との真情からくるものでもあったろう。平生にとっての「主人」は、高商時代の師たる矢野二郎であり、良きパートナーではあったが東京海上時代の各務鎌吉であったかもしれない。しかし国家的レベルでの公的活動にあっては文部大臣に推奨してくれた陸軍大将にして陸軍大臣寺内寿一であった。あるいは枢密顧問官に推奨してくれた陸軍大将にして内閣総理大臣東条英機であったかもしれない。しかし何よりも武士でいうお目見えが叶った昭和天皇であったろう。

ただ滅私奉公を実践する臣釟三郎の経緯は、暫く置くとして、ここでは昭和四1929年９月30日の日記に認めてある四つの liberate、即ち「余は今日に於いては学校教育を官僚的干渉及び画一的模倣の弊害より liberate すること、産業貿易を保護干渉より liberate すること、国語を漢字の禍害より liberate すること、疾病を営利的医術より liberate することを以て余生涯の事業として努力勇往せんとす」[27]（⑪42）との発言に沿って平生の具体的な公的活動を見てみよう。

先ずは既に言及したが、甲南高等学校創設である。平生は自由にして個性を生かす人物の養成を旨とした真の意味での「公有」とそれを位置付け、新教育主義を実現する「公」の機関と、正にパブリックな私立学校として甲南を位置づけている。これは大正自由教育運動の一環ともいえるが[28]、国民教育の官僚的形式的模倣的束縛からの自由である。ちなみに平生が唱えた四つの自由の20日前、即ち1929年９月10日、文部省は国体観念明徴・国民精神作興のため教化動員を実施し、その旨を各学校に訓令している。

次に産業貿易の保護干渉からの自由であって、これは既に触れた自由通商協会、あるいはロータリー活動への積極的参加によって知ることができる。平生は公的活動の一環としてブラジル訪問を前に東京ロータリー・クラブでの送別晩餐会において、「余は人生の定命を過ぎたる長き体験より、世界人類の幸福と平和は Rotary の精神と自由通商主義に依ってのみ得らるるもの」と述べ、「この思想が一般に認識せられ、accept せらるるにあらざれば未来永劫世界の

平和も人類の幸福も得らるべきにあらず」と断言する。「狭義国家主義に惑溺して大乗的 nationalism」を認識することなく、「民族は互いに抗争を事とすべきものと前提し自給自足主義を高調し、延べて鎖国の旧態に立ち戻らんとするものに至りては実に驚くべき事である」として「nationalism を高唱しつつ一面には我国産の輸出は奨励すべしなど、実に虫良き意見を発表して平然たるものあるに至りては呆然たらざるを得ず」と論ずるのである（⑮544）。関税障壁を設けて、自国産業を外国品との競争から隔離保護し、他国には自国品を廉価にて販売することは不条理にして矛盾するものと批判する。そうして貿易互恵主義を取ることこそ共存共栄よろしく恒久的平和と好況を保障するのである。そうしてこれこそが平生に在っては「我々は Rotary の主張に依り、Service above Self. の如く、先ず以て彼の物質を買い入れ、以て One Profits Most Serves the Best. の鉄則に拠らんとするものである」（⑮503－04）。

しかし世界は平生の意図とは異なって国家社会主義が自由資本主義を駆逐しつつある時代であった。ソ連の社会主義、イタリアのファシズム、ドイツのナチズム、アメリカのニューディール、これらは平生からみれば state socialism の動向である。国民の福利と国家の隆興を第二として自己の財貨の増殖を主眼とする自由資本主義ではなく、その点を踏まえた上での自由通商を平生は唱えるのであった（⑮643）。

但し世界が平生が恐れたようにブロック経済に突入した時点では自由競争を伴う貿易というよりは、一種の分業に基づくそれを平生は推奨する。北支経済顧問として北京に平生は晩年派遣されるが、そこでの経済政策の提案は中国北部の原料を日本が輸入し、その加工品を中国北部に輸出することによって中国北部の住民も豊かになり、日本も豊かになるというものであった。競合による工業製品の自由貿易は満州と日本の例を挙げて反対する。平生は自由貿易が世界的に拡大することを望んでいたが、大国アメリカの保護貿易政策や計画経済政策、さらには英国は早く保護主義の旗下に屈しており（⑬376）、他のヨーロッパ諸国の国家社会主義化に直面して東アジアの貿易圏での分業に基づく自由通商に限定されることを余儀なくされ、それも当初批判していた欧米統制経済に組み込まれ、自身、国家社会主義的経済政策を取る事を余儀なくされるに至

る[29]。

第三は国語の漢字の束縛からの自由を計ることで、カナモジカイでの活動においてそれを見ることができる。既に述べた政治教育などに、漢字学習に費やすエネルギーを振り替えることである。平生が急進的漢字廃止論者になるに至った経緯は、「近来親交を結びし某氏の子女にして英国に生まれ英国小学校に於いて三四年養育せられし児女の知識が、其進度に於いて同年輩の我小学生と同日の論にあらざることを発見して、如何に漢字を知る為に日本の小学生が其の精力を消耗しつゝあることを切実に感得して、漢字の廃止が一日も忽ち(たちま)にする能はざるを感ずること深甚なればなり」に明らかである。平生の子供と同じ11歳の小学四年生が英字紙タイムズを読み、九歳の妹の小学三年生が難解な英文を通読して意味を理解するのを見て、「余は驚愕措く能わず」との感想を持つのである。外国語の修得によって知識を補なわざるを得ない位置にある日本人が、「単に漢字を学ばんが為め時と労を浪費するに於いても、到底文化の点に於いても、経済の発展に於いても、欧米人に追従すること困難ならんを思ひては、心を安ずる能はざるにあらずや」である（④229）[30]。そうしてそれはさらに法律用語の俗文化への意向にも通じる。即ち「国民をして法を知らしむるは立憲政治の真随なり」である。一視同仁四民平等の時代になった以上は国民の権利義務を規定する法律や命令が専門家のみ理解可能で義務教育を受けた庶民に理解不能では、「法は依らしむべし知らしむべからず」との専制政治時代と変わらないというのである[31]。

第四は医療の営利的医師からの自由であって、これは甲南病院の設立によって見ることができる。平生は開院式において、その設立理由を次のように述べている。「人類の生存を脅かし、幸福を傷つくるの一大原因は病気」であり、「一家の中一人の病人生ずれば一家中は憂愁の気」が満ち、病人のみならず一家が心を傷め、労を費さざるを得ない。病気のために一家の収入は減じ、支出が増す結果は、「貧乏の淵に沈み悲惨の境」に陥ることになる。こうした家庭は多く、しかも格差社会化している中に在って、「中流以下の人々は眼前に進歩した医術と良薬を見ながら資力乏しきため其恵沢に浴すること」ができない。それは人生において惨めなことである。「丈夫で元気で働き居ったこそ辛うじ

て生活の資料を得つつある中産以下の人々が十分合理的治療を受くることは思いも寄りませぬ。富める者のためには百里も二百里も遠しとせずして名医が来診いたしますが、富まざる人の為には此の地に在りて大阪や京都から名医の来診を求むることができませぬことが常態であります。……病気は何人も避け得られぬ丈に、病みて十分の治療を受くる能はざる人々が多数なる我国の将来を思ふ時、慄然たらざるを得ませぬ」。こう述べて、平生は余裕ある人々が社会奉仕こそ「人生の真意義」と信じ、その余裕の一部を割いて「人類共存の精神」の具体化として中以下の庶民が「疾病の苦悩」から軽減すべく甲南病院を開院したのである。しかもそれは「医は仁術」の真義を理解する医師と共に付き添いでない、食事も附いた完全看護も兼ね備えるものであった。「病人本位」の「病人の病院」たらんとしたのである（⑮71－72）[22]。

お　わ　り　に

平生は北支那方面軍司令官寺内寿一の下、北支経済顧問に就任するに当たって、「余今や七十三才の高齢に達し何物をも求むる処なし。物質的には衣食足り、社会的には内閣に列して陛下の咫尺（しせき）するの位地を得、天寿已に七十三才に至る。余生を君国に尽くすは当然の事である。君国の為奉仕すべしとの事なれば何ぞ之を辞せんや。単に寿命を伸さんがために養生専一として労を厭ひ逸を好みて悠々自適するも、徒に寿命長しといふのみ。君国の為寿命の長らんことこそ望むなれ、徒食世に在するも何の楽しみかあらん」（1938年３月２日）と述べ、さらに「今回の重任を引き受くるにつきては全然自己を空ふし、滅私奉公の精神を以てしたる」と語り、「君の為尽くす月日の長かれと己忘れて今日も過ごせり」（同年３月３日）との決意を新たにして詠っている。公に尽くすパブリック・モラリストとしての晩年の心境である。

ところで平生は大正三1914年12月４日、自らの人生訓として「常に権勢に屈せず、富貴に諂わず、一生を通じて自我の精神を一貫したしとは、余の宿望なりしが、……他に依頼せず、他に累を及ぼさず、独立独歩自主的精神を以て一生を貫通するは、真に嘉すべしといへども、同時に人類相愛し、相救（たす）くるのユーマニチーを涵養し、以て社会人類をして出来得るだけ均等にその福利を享受す

ることを期す」（①208）との決意表明を認めている。ここには、自分らしく生きる個性（私徳論）とともに人らしく生きる人格（公徳論）の葛藤を見ることができる。平生の人生三分論でいえば、確かに公徳を最大限発揮したのは人生の第三ステージである奉仕時代ではあった。

然し男の中の男たる武士が家職として独占的に関った「公」は、平生にあっては武士道をその思想の核としているけれども、もはや単に他律的な原義からくる「奉公」の「公」である「大宅」、即ち第一の大きな家、即ち国家、あるいはそれを代表する天皇家のみではない。ここからくる「ただ天下国家を治むるに公を貴ぶ者は、人の上たるの道なり」と、「己の独り専らにする所、これを私と謂ふ」、その「私に反なる」ものが「公」であり、正に「衆の同じく共にする所」の「君子の道」を実践する「お上」の「公」（荻生徂徠『弁名』1717年頃稿）[33]のみではない。今や地位や財産、あるいは性差からすら解き放された国民一人ひとりが共通の目的に主体的に関り参加する空間こそが「公」である。本稿で触れることは無かったが、住環境に密接に関係する地域問題、女性の家外での活動への参加も「公」である。平生は人間の生き方を考察しつつ、地域や実業や教育、あるいは医療や政治の世界における「公」を説き続け、「公」に生涯に亘って参加していたといえる。パブリック・モラリストたる所以である。

注

⑴　以下、「平生日記」からの引用参照は、目下刊行中の甲南学園平生釟三郎日記編集委員会編『平生釟三郎日記』（甲南学園、2010年～）を使用し、このように略記する。但し片仮名を平仮名に変え、送り仮名についても変更した所がある。未刊行のものについては年月日を記す。尚、本稿は2016年６月11日に開催された平生釟三郎生誕150周年記念シンポジュウムでの「人間　平生釟三郎―パブリック・モラリストとして―」と題する講演、及び『平生釟三郎日記』第13巻附録「パブリック・モラリストとしての平生釟三郎」と題するエッセーに加筆修正したものである。

⑵　この点の経緯については『平生釟三郎自伝』名古屋大学出版会、1996年、308－10頁参照。執筆は1935年頃。尚、本書からの引用参照は（自308－10）の如く略記する。

⑶　『丸山眞男講義録［第五冊］日本政治思想史1965』東京大学出版会、1999年、41

頁。尚、武士道論全般について本書41－256頁参照。

⑷ 荻生徂徠著・平石直昭校注『政談　服部本』東洋文庫、2011年、73、116頁。

⑸ 武陽隠士著・本庄栄治郎校訂・奈良本辰也補訂『世事見聞録』岩波文庫、1994年、20、28頁。

⑹ 慶應義塾編纂『福澤諭吉全集』第三巻、岩波書店、1959年、99頁。

⑺ 平生釟三郎述『私は斯う思ふ』千倉書房、1936年、45－47頁。

⑻ 山口県教育会編『吉田松陰全集』第三巻、岩波書店、1939年、41－42頁。

⑼ 原文は“God”ではなくて“Heaven”である。即ち“Heaven helps those who help themselves”が冒頭を飾っている。Samuel Smiles, *Self-Help With Illustrations of Character, Conduct, and Perseverance,* Oxford World's Classics, 2002, p. 17

⑽ 天野貞祐『教育五十年』南窓社、1974年、11－13頁。高木八尺「三谷君と内村・新渡戸両先生」（南原・髙木・鈴木編『三谷隆正―人・思想・信仰―』岩波書店、1966年）8～12頁。

⑾ 「喧嘩なら堂々とやれ！」が明治期の訳であり、新渡戸が引用している箇所の原文は“to leave behind him the name of a fellow who never bullied a little boy, or turned his back on a big one.”（Thomas Hughes, *Tom Brown's Schooldays,* Edited with an Introduction and Notes by Andrew Sanders, Oxford World's Classics, 1989, p. 313）であり、「幼童を虐げず、巨童に背を示さゞりし男児なりとの名を伝へん」と訳されている。新渡戸稲造著・櫻井鴎村訳『武士道』丁未出版社、1908年、11頁。ちなみに本訳書には新渡戸が京都帝国大学法科大学教授時代の1905年４月に著した「上英文武士道論書」が掲載されている。そこには武士道が「宇内の儀表」であって「衆庶をして忠君愛国の徳に帰せしむ」るものであり、「皇祖皇宗の遺訓と、武士道の精神とを外邦に伝へ、以て国恩の万一に報い奉らんことを」とある（同上 1, 5 頁）。尚、Inazo Nitobé、*Bushido The Soul of Japan,* Tokyo: Teibi Publishing Company, 1908, pp. 7-8, トマス・ヒューズ作・前川俊一訳『トム・ブラウンの学校生活』（下）岩波文庫、1952年、126頁。

⑿ 丸山前掲講義録、73－75頁。

⒀ 池辺義象編『国文叢書　源平盛衰記』上巻、博文館、1913年、439頁。

⒁ 井上哲次郎・有馬裕政共編『武士道叢書』上巻、博文館、1905年、252－53頁。

⒂ 田原嗣郎・守本順一郎校注『日本思想大系32　山鹿素行』岩波書店、1970年、32頁。

⒃ 博文館編輯局編『続　帝国文庫』第三十一篇、博文館、1901年、786頁。

⒄ 竹内理三他編・校注『日本思想大系８　古代政治社会思想』岩波書店、1979年、191頁

⒅ 池辺義象編『国文叢書　源平盛衰記』下巻、博文館、1914年、370－71頁。

⑲　丸山前掲、78－81頁。

⑳　渡辺浩『日本政治思想史［十七～十九世紀］』東京大学出版会、2010年、45頁。

㉑『教学刷新評議会資料』下巻、芙蓉書房出版、2006年、17頁。

㉒「我が国教育の淵源たる国体の真義を明らかにし、個人主義思想と抽象的思考との清算に努力するの外はない」として西洋近代思想の特徴を個人主義にあるとして、これを排除し、国体を明らかにする論理が展開されている。文部省編纂『国体の本義』文部省、1937年、5,154頁。

㉓　教育基本法第14条には良識ある公民としての必要な政治教育は、教育上尊重されなければならないとし、特定の政党を支持し、これに反対する政治教育や政治活動などは禁止されている。

㉔　渡部宗助・竹中憲一編『教育における民族的相克　日本植民地教育史論Ⅰ』東方書店、2000年、174頁。

㉕　喜多由浩「うたかたの宝石箱―満州文化物語　㉒」『産経新聞』朝刊、2016年4月22日号13版参照。

㉖　渡辺前掲、40－41頁。

㉗　同年12月5日の日記には「1．国民教育をして官僚式形式的束縛より解放すること　2．企業を自給自足主義の保護干渉より脱出せしむること　3．国語を漢字の羈絆より自由ならしむること」（⑪143）これには治療の営利性からの解放は含まれていないが、平生が文政審議会委員に任命された時の挨拶である。この三つの自由を強調する前に平生は「古武士ども」と「官僚連」の居並ぶ前で、「小生の如き野人が何事をなすこともできぬと思ひますが、少なくとも小生如き門外漢を其一員に加ふることを決行せられたことは、現政府［浜口雄幸内閣―引用者］が自由を尊び革新を望まるることを示すものにして大いに満足いたし居ります」と満足を以て応え、「要するに将来国民をして立憲的ならしめ、産業をして健全なる発達をなさしめ、文化をして堅実なる進歩をなさしめんには、小生は左の liberation が必要なりと思ひます」と政治・経済・文化領域における自由の必要性を訴え、自由独立の町人の都市としての大阪在住実業家としての矜持を付け加えている（⑪143）。

㉘　この点、拙稿「平生釟三郎と大正自由教育」（高野清弘・土佐和生・西山隆行編『知的公共圏の復権の試み』行路社、2016年、157－85頁）参照。また平生の教育的側面については拙稿「平生釟三郎と甲南教育」（拙編著『現代日本と平生釟三郎』晃洋書房、2015年、86－108頁）参照。

㉙　こうした推移については瀧口剛「満州事変後における自由通商運動の軌跡―「大東亜共栄圏」への道」（『甲南法学』第57巻第3・4号、83－131頁）参照。

㉚　この点、有村兼彬「平生釟三郎と漢字廃止論」（前掲『現代日本と平生釟三郎』185－199頁）参照。

㉛ 『拾芳』第八号（『甲南法学』第37巻第４号、203－07頁）参照。

㉜ この病院建設をも含めて平生の社会奉仕について柴孝夫「平生釟三郎と社会奉仕」（前掲『現代日本と平生釟三郎』213－28頁）参照。

㉝ 西田太一郎他校注『日本思想体系36　荻生徂徠』岩波書店、1973年、105頁。

文化遺産としての向日庵

――過去を見つめ、未来を見すえる「開かれた場」――

中　島　俊　郎

壽岳文章先生（1900-92）は常々、ものごとを観察するのにはふたつの見方があるといっておられました。対象を巨視的に見る視線と、微視的に注視する視座―すなわち望遠鏡ではるか彼方を見るような見方と、手前にひきつけ肉眼でもって凝視する、微視的に見るといった双方の見方を自在に意識的に使いこなせる重要性を説かれています。対象を立体的に、かつ具体的に把握するため、そうした両視座が必要であるというわけです[1]。何ごとを観察するにしてもふたつの視座をたえずそなえておかなくてはいけないというのが先生の教えでした。

向日市の歴史的展開

今、私どもの法人はどのような意義をもつのか、なぜ設立しなければいけないのでしょうか。ここに「文化遺産としての向日庵」という演題がついています[2]。当地、向日市のことを多少たりとも知らなければいけないと考え、壽岳先生の言われる巨視的な見方ではありませんが、幸い『向日市史』という地域史が当時の民秋市長のもとで上下２巻にわたり編纂されています。その「発刊の辞」が、簡にして要を得ていますので引用してみましょう――

＜向日市は、今から1200年前、宮都―長岡京―が営まれた王城の地であります。江戸時代に入って、西国街道沿いに商工業が発達し、乙訓郡内の政治・経済・文化の中心として栄えました。その後も、京都と大阪を結ぶ交通の要衝として発達し、とくに近年は、住宅都市として変貌を遂げているのであります。このような向日市の歴史的な発展の足どりを明らかにして、

これを後世の人々に正しく、かつ詳しく伝えることは、現在に生きる私たちの責務であります。（向日市長、民秋徳夫「発刊のことば」『向日市史』上巻）＞（下線部は引用者による、以下すべて同じ）

このように『市史』をひもといていきますと、長岡京から平安京に移るわずか10年間の都ですが、律令制度のもと、どのような生活が営まれていたのか、生活史としてもすぐれた記述が多く書かれていて、私たちは当時の人々の営みを理解できるわけであります。翻ってみれば、ここ乙訓は日本史そのものと言っていいくらいの歩みを形づくっている土地である、と評しても過言ではないでしょう。まことに豊かな歴史にあふれている地域であります。

弥生時代から長岡京へ、そして今日に至るまで歴史は延々と流れているわけですが、そうしたなかで私たちが集って今、話題にしている向日庵（こうじつあん）の背景として考えられる、「住宅都市としての変貌」云々という箇所が『市史』に記述されています。今日、郊外都市の文化史、建築史というテーマは世界的に概観してみても学際的で多岐にわたる研究対象となっています。

ここに神戸から持参しました大部な英語で書かれた『構想されたパラダイス―田園都市と近代都市―』（2013年）によりますと[3]、この文献は研究の一端をまとめたものでしかありませんが、郊外都市は人間の手で計画され造られたパラダイス（天国）、すなわちキリスト教の国の人たちの考えによりますと、都市は神の手により造られしもの、しかし郊外都市は人間がつくったパラダイスなのだという視座が展開されています。日本の例として東京の田園調布、大阪の千里ケ丘などが詳しく紹介されています。そして、ヨーロッパ、ロシア、北アメリカなど世界的な知見のもと、郊外住宅の諸例が大いに議論されています。そうした郊外都市の中に位置する向日庵はいま文化的な検討材料として、どのような分野からもリサーチ対象になり得るものであるという前提を、つまり学際的なアプローチを必要とすることを私たちは忘れてはならないと思います。昭和初期に郊外都市として発展を遂げていく推移のなかに向日庵はあったのです。おのずと、こうした見方には微視的、巨視的な両アプローチが必要となってきます。

他方、『市史』によりますと、向日市の願徳寺（宝菩提院）に元あった薬師仏檀像は弥勒菩薩像で有名な太秦広隆寺に移されて広隆寺の本尊として祀られています。こうした歴史の流れに注目しますと、五百年、千年という時間のスパンで文化を巨視的に、かつ微視的に見なくてはいけない土地柄がよく理解できます。私たちが生きている現在、つまり2017年ですが、千年後の3000年の未来から、逆に私たち向日の郊外都市文化というものを見たとき、向日庵がどのような意味をもつのか、そうした壮大な視座を忘れることなく、今日は向日庵について、ご一緒に検討していきたいと考える次第です。

向日庵の人々

今日、ご出席して下さっている方々のなかには、向日庵のこと、そこに住み生活をされていたご家族四人についてご存知で親交を深めておられた方も多々いらっしゃると思います。当主の文章先生をはじめとする四人のご家族が住まわれていましたが、四人それぞれを個としてみても、このご家族はゆうに研究対象となりえて、それぞれの分野において研究者が対峙し乗り越えて行かねばならない対象であります[4]。

壽岳文章先生は、1929（昭和４）年、日本の書誌学の嚆矢ともいえる『キリアム・ブレイク書誌』を作成されました[5]。そして書誌学の知見が英文学研究と連携を保ちつつ、やがて和紙研究の方へも進んでいかれ一家をなします[6]。そして最後は畢生の訳業、ルネサンスの傑作であるダンテ『神曲』を訳されて生涯を終えられました[7]。

夫人であるしづ（静子、1901-81）は、不幸な生い立ちを創作の糧として早くから、（―昭和初期に、『芥川龍之介全集』とともに岩波書店の宣伝に掲載されていたのが非常に印象的ですが―）、『朝』という自伝小説でよく知られています[8]。そして後年には『歳月を美しく』という創作集もあります。壽岳文章先生が教えられた英語力をもとにして、ハドソン、ジェフリーズといったエコロジーを主調とするようなイギリス文学の翻訳を数多くなされ、これらは古典として岩波文庫に入っていて今日でも広くの読者をあつめています[9]。

そして壽岳章子先生（1924-2005）、この方は壽岳家を代表するようなスポー

クスマンとして活躍されました。ご専門は国語学でしたが、その枠にとらわれず、女性学からいわゆる世間知に溶けやすい、ことばを媒介にした歴史、ジェンダー、また京都の町家の暮らし、方言などに関する数多くの著述を通じて、私たちの蒙をひらいてくださいました。今日、話題になっています町家保存はつとに章子先生が力説されていたところで、透徹した先見性には驚かされます。

京都大学を出て、東京大学天文台で研究されていた壽岳潤先生（1927-2011）は、『星座をみる楽しみ』、『宇宙論はいま』などのご著書をお出しになっているばかりか、発見した星にはご自身の名前までついています。アメリカに留学され、その後、数え切れないくらいの英語論文を国際的な学会誌に公刊されておられます。芯からの科学者で、俗信となっているような超自然現象を科学的に検証しようとされ、『スケプティックス』（懐疑）という国際的な雑誌を発刊され、科学知の啓蒙に力を注がれました[10]。

今、述べましたように、個々の業績は理解できるのですが、では向日庵という全体的なものとなれば、何が浮かんでくるのか。何を私たちに訴えようとしているのか。冷静に多大な業績をつらつら見るに、この四人が少なくとも文字を媒介にして、「ことば」でもって私たちに何かを伝えようとしたといえるのではないでしょうか。英文学、天文学、言語学から、日本文学などとまったく方向は異なりますが、その筆になり訴えてきた言葉は反戦、非戦を声高にさけび、自然との共存、相互扶助の精神を私たちに滔々と説いてくれました[11]。今日でもそうした文字はいささかも古びてはいません。

ここにおられるほとんどの方は向日庵の建物をご存知かと思いますが、多くの方々がその中へ入った経験はないのでは、と思われます。潤先生の追悼集からとらせていただいた向日庵の写真をご覧ください。最初にある写真が潤先生にとって、青年期まで過ごされた住居、向日庵です。ここで写真というヴァーチャル空間をざっと一緒に歩いていきますと、向日庵の四人がどのように暮らして、何を考えて、何を見つめてきたのか、今改めて再検討を迫られているようです。

ここに「私たちの歩んできた道」という短い一文がありますが、こうした著作集は日本文学史上でも類例が余りないと思われるのですが、先生は夫婦を個

とした著作集を出されました。これは、『壽岳文章・しづ著作集』全６巻を紹介するために自らお書きになった一文ですが、ここにおふたりの人生観が要約されているゆえに、意味深い一文と言えましょう。

＜この夫婦は、いつも自分の目で見、自分の目でたしかめて、媚びず、臆せず、正しいと信ずる一すじの道をこつこつと歩み続けてきたようである…昔のかしこい人は、自分のうちにささやく静かな小さな声を道標として、人生の航路を歩んだというが、この夫婦も、自分たちの生活信条にできるだけ純粋であろうとした。（『壽岳文章・しづ著作集』案内文）＞

ここで説かれている「自分のうちにささやく静かな小さな声」、これはどのような声なのでしょうか？これは私がことさら規定してしまうのではなく、このフロアにおられる皆さまが一人ひとり考えるべき「ことば」ではないでしょうか。多様な反応が示されるでしょう。そのため、今日、私の話は示唆するにとどまるだけではないか、と思います。でも同時に、それでいいのだと考える次第です。というのも、個人の生き方は押しつけるものではないからです。では、生きることについて、どのような発言がなされたか、以下、具体的に検討していきましょう。先ず、国際性という観点から始めていきたい。

壽岳文章「洋の東西を問わぬ人の縁」

朝日新聞の同じ欄に、親子がそろって掲載されたという珍しい例がここにあります。その一文というのは、1990（平成２）年３月に載りました「自分と出会う」という壽岳文章先生の記事と、ほぼ10年後、1999年２月に載った潤先生の記事であります。これを対照し、合わせ鏡にして読んでいくと、興味深いことが浮き上がってきます。ハーバード大学の理事であるケラーという著名なドン・キホーテ蒐集家がいるのですが、そのケラーからある依頼が先生のもとに届きます。これは、小説の祖と言われるスペインの名作『ドン・キホーテ』を世界規模で蒐集して、書誌を編纂しようという壮大な計画でありました。日本におけるドン・キホーテ文献を蒐集して欲しいという依頼が文章先生のところ

へ舞いこんだわけであります[12]。ところが依頼は書誌だけではありませんでした。つまり美しい挿絵の入った和製の『ドン・キホーテ』制作依頼まで加わったのであります。

＜貴国人は古来絵画芸術にすぐれているのに、現行の貴国絵入り本に見るべきものが一つもないのは残念だ。こうなれば万事君に任すから、君が適当と思う現代の日本画家の、われらの親愛なる騎士（ドン・キホーテのこと）の名をはずかしめない作画がほしい、と言う。柳宗悦や河井寛次郎とも相談の末、白羽の矢を芹沢銈介に立てた。染色家の天分に恵まれた芹沢に不可能なはずはない。＞

ここで言及されている三名の名前は民芸運動の中心的な指導者で、壽岳先生も自らこの運動の最先端に立たれたわけですが、このように先生の日常環境のなかで、何ら違和感もなく民芸の世界に生息しておられたことが伺われます。しかし、そうしたこと以上に、ケラーとのつき合いが、どのような性質であったのか、が語られている興味深い一節に私たちは遭遇します――

＜…なくて困っている物質があれば遠慮なくいってよこせと次信にあったので、私の靴型を紙にとって送ったら、ボストンのチャイナタウンでやっと見つけたのがこれだ、と何足か送ってくれた親切も忘れない。京都大学で天文学を専攻した息子が戦後最初のフルブライト留学生としてミシガン大学に入ったと知るなり、所定の学費だけでは不自由だろうと月々若干の金員を送金してくれた。（壽岳先生らしいのは次のことばです）洋の東西を言あげしないこの種の出会いをこそ、私は妙好趣と呼びたい。（「自分と出会う」『朝日新聞』1990年３月12日）＞

この「妙好趣」とういうのは先生の造語であります。「妙好人」とは浄土真宗で在野にある俗信徒のことを指しますが、「趣」も浄土真宗では死後における存在の状態を意味します。この言葉を先生はどのような意味でもって言われた

のか、大いに考えさせられるところであります。

そもそも先生の考え方にはたえず、仏教、浄土真宗、ブレイクの神秘主義が並置されていて、そうした先賢が書かれた行間を自由に行ったり来たりされるのです。たとえば、先生がまだ京都大学に籍をおいている頃に書かれた文章が載っている雑誌『英語研究』（大正13年）をみますと、「ウィリアム・ブレイク法悦のうた」（壽岳紫朗）とあります。法悦という言葉は、ブレイク本来の意味から大きく逸脱していると思うのですが、深く考えてみると逆に納得させられます。紫朗というペンネームは仏教徒そのものです。

先生は海外の学者の説を模倣・紹介に終始する英文学研究の在り方に疑問を感じておられました。柳宗悦と先生のブレイク研究は学説の模倣をことさら避けようとする傾向がありました[13]。そのために最初は大いに誤解されましたわけです。つまり仏教の教義とキリスト教圏の教義が一致するわけはない、というわけです。確かに表面的にはそうでありましょう。しかし、その一文の冒頭を見ますとブレイクの顔のことが書いてあります。「ブレイクの顔にはどこか、わが国の古代の芸術家が木彫りした明王や菩薩の面影が似通う」という一節があるのですが、つまりたえず仏教文化においてロマン派の巨匠とを相対化して先生は見ていたことが、よく理解できるのです。あくまでも自己本位の立場は崩されませんでした。

壽岳潤「報われることの無い研究を続けて」

文章先生のこうした言葉を受けて10年後に壽岳潤先生のほうは「報われることの無い研究を続けて」という文を、同じ欄に書かれています。こうした一文から向日庵ではどのような教育がなされていたのか、どのような人間と交渉があったのか、という内実がよく伝わってきます。

＜私は、小学生のころから星空に関心を持った。当時、大阪の四ツ橋にできたばかりのプラネタリウムに月替わりのテーマを毎回聞くために、一年以上、京都から通い続けた。原田三夫著の『子供の天文学』（太陽系の解説をしている啓蒙書―引用者）と山本一清編の『天文学講座』が現在の私

の天文学に関する知識の基本を形成したと思っている。>

人文学者・英文学者であられた文章先生が、わが子に対しては、文系に進めとかそのような助言は一切なさらず、理系の天文学へ自由に専攻させます。しかし、つらつら考えると、ウィリアム・ブレイクと天文学は関係が無いのかといえば、これまた表裏一体をなしていることが分かってきます。星を一方は理知的に、他方は情感的に見ていたのかもしれません。潤先生はこの一文の最後に以下のような言葉を述べられています。

<「あなたは宇宙人の存在を信じますか」と尋ねる人をよく見かけるが、科学は信ずる、信じない、の問題ではない。意味のある設問を科学的に判断できることが分かった場合、それを追究するのが科学である。ちなみに、昔、ソクラテスは天文学の有用性よりも、その非実益性の重要さを説いたが、時の政治家は危険思想としてかれを排除したのだ。(「自分と出会う」『朝日新聞』1999年2月16日)>

これは学者として毅然とした、並々ならぬ自信にあふれた「ことば」だと思います。壽岳潤先生は学者として発信をしたばかりか、いわゆる専門家とアマチュアとの架橋をたえず考えられていました。

では、このような一家が生み出した、つまり全体としての向日庵ですが、私たちの設立趣旨書に次のような一文があります――「向日庵は戦後の駐日英国大使・ジョン・ピルチャー…など海外からも多くの著名人が訪れる民間の国際交流の場でもありました」と。敗戦国の民間人の家に、戦勝国の英国大使がやって来る、この文言でしたらそのように読めます。しかし、私たちが解明しなければならないのはこの先なのです。

ピルチャーはケンブリッジ大学を出て、すぐに日本にあった英国大使館の通訳部門に応募します[14]。その2年後、京都に移り日本の仏教を知るために、相国寺で2年間修業します。もっとも得意としたのは京都弁をあやつる、という大変な親日家でもありました。つまり、この向日庵へピルチャーがきたという

ことは、ウィリアム・ブレイクを話題にしたということもあるでしょうが、もっと大切なことは、壽岳文章先生と仏教に関する知見を分かち合ったという事実です。こうした共通の知見のうえに立って、時事問題から日常生活にまでわたる諸問題を語り合っていたのです。つまりこのピルチャーは英国大使で、日本・英国両国の橋渡しをした人であります[15]。こうした文化の読み換え、解釈という営為を考えていきますと、翻訳こそ文化の架橋作業の一手段なのです。では、次に翻訳という視点から壽岳家の人々を考えていきましょう。

翻訳の周辺

若き壽岳潤先生と父、文章との間でどのような交渉があったのか、それが、いかに現代的な意味をもつのかを、ここでその一端をお伝えしておきたいと思います。

> ＜戦後父はギルバト・ホワイトの『セルボーン博物誌』を岩波文庫のために翻訳しましたが、その索引の製作を私が引き受けました。父は索引の重要性を強調していましたが、私もそう思います。昔にくらべてかなり改善されましたが、立派な洋書が翻訳本になると、索引が省かれる場合が今でも見られます。そのほか、校正の重要性、本の扉だけに別の質の紙を使う愚劣さ、書誌の形式など、造本について多くのことを父から学びました。情報を伝えるための書籍の形態はほとんどかわっていきますが、紙を使った本の形態は永遠に（人類の歴史で）不滅だと信じます。父が日本に定着させようとした造本の思想が、どなたかに引きつがれてゆくことを望みます。（壽岳潤「父の思い出」『壽岳潤追悼集　地上の星座』）＞

今日、私たちはこの索引（インデックス）の大切さが目にみえる形で、日常生活に溶け込んでいます。それはインターネットの情報検索です。単語を見出しとして検索していくと、その内容を知ることが即座にできます。つまり「目次」と「索引」は表玄関、裏玄関という以上に、どちらも相当な重要性があるのです[16]。壽岳先生は索引がもつ重要性を痛いほどお知りになっていて、名著が翻

訳されても、索引をつけようとしない日本の出版界の悪しき慣習をよく嘆いておられました。潤先生は幼き日に『紙漉村旅日記』のなかに父親から依頼されて、両親が調査におもむいた地方の地図を描いておられますが、父がどのように息子を教育したか、おのずと分かってきます。潤先生の達意の英文を拝読しますと、父からどれほどの恩恵を受けたのか、想像をついふくらませてしまいます。書斎にある書物を自由に使わせてもらうだけでも、子供には計り知れない勉学の機会となるのです。潤先生はあの「森林のような書斎」（増野正衛先生の言葉）でどれほどの知見をはぐくまれたのでしょうか。翻訳の問題をさらに深めてみましょう。

エコロジーの系譜

文章先生が訳された『セルボーン博物誌』の中に、英国詩人エドモンド・ブランデンが序文を書いています。ブランデンは東京大学の英文科教授で、多くの教え子から崇拝された教師でありました。そのブランデンは大変な酒好きで、壽岳先生から近くにサントリー醸留場があるから飛んでこい、という誘いに惹きつけられ向日庵を訪れたという逸話を残しています[17]。ブランデンは原爆ドームの石碑に平和を祈る詩文を捧げますが、訳詩をつけたのが文章先生であります。博物誌の名著とうたわれる『セルボーン博物誌』に寄せられたブランデンの「序文」を文章先生がみごとに訳されています――

> ＜今また私は、ホワイト畢生のこの名著の、壽岳文章教授の手になった翻訳のよろこび迎えられるのを、重ねてうれしいことに思う。これは、訳者の持つセルボーン風の親和感（自然への敬愛・一体感―引用者）や読書域（ブレイクにはじまる先生の専門とするロマン主義の知見―引用者）からみて、訳者にとってはこの上もなく打ってつけの企てである。私は彼（壽岳先生―引用者）がホワイトに新しい読者圏を与えてくれたことを、心からの喜びとする。なぜなら、ホワイトの示す態度の重要さは、ただ、文学の世界だけにとどまるものではない。＞

古典が最適の訳者をえて古典としてよみがえる瞬間です。そして、最後に、この名著が何を訴えているのか、ブランデンの手によって説かれています。この結句は、人類の未来に対するひとつの託宣とも受け止めることができます。

＜今後人類が生き残ってゆくかどうかは、ひとえに爾余の自然に対するこの態度にかかっていると言っても言いすぎではないのである。（エドモンド・ブランデン「序文」『セルボーン博物誌』）＞

私たち日本人の先祖は、一寸の虫にも五分の魂が宿るといって、生命を慈しみました。ところが、いつしか日本は大国になって生きとし生きるものを尊ぶ自然観を捨ててしまい、公害をもたらすような産業の邁進をはかっていき、大きな代償を後代が支払うようになってしまいました[18]。これは大きな教訓です。

しづ夫人とハドソン

さて、英語を通じて翻訳による文化の橋渡しがよく具現化されるのは、夫人の翻訳を通じてであります。夫人は大学などに行かずに文章先生から直接に英語を学ばれたと聞いています。では、しづ夫人はどのような作品を翻訳されたのでしょうか、またその意義はどこにあるのでしょうか。しづ夫人はこの向日町の竹林を愛でて、何度も何度もその美しさ、雄勁なしなやかさをお書きになっています。そうした一文を読むにつけ、私たちは向日庵の人たちが、いかなる自然観でいたのかがよく理解できます。

W. H. ハドソンの『はるかな国　とおい昔』（岩波文庫）は今日でも版を重ねている名著中の名著であります。然るべき訳者をえて、原作がどのようによみがえるのか、典型的な例をここにみる思いです。巻末にあるハドソンの文章は以下のごとく訳されています。漢字とひらがなの割合の絶妙さがひとつのリズムを奏でて、読者を思わず引き込みます。凡百の訳者ではこのようにはならず、表面をなぞるだけで終始してしまいます。

＜自然との交わりがもたらす幸福は、決して失われるものではなく、私が

お話しした、あの機能のおかげで、私の心に及ぼす力を、だんだんと増し加え、再び私のものとなるのでした。（一度自然のもとで感化されたら、私たちが逆に養育されていくのだ―引用者）だから、長い長い間、自然との交わりを断たれて、ロンドンに住み、貧しく、友もなく、病気がちの日々を送らねばならなかった私の最悪の時代さえ、なお、生きていないよりは、生きているほうが、ずっとずっと、はるかによいと、私はいつも感じることができたのです。（W. H. ハドソン　壽岳しづ訳『はるかな国　とおい昔』）＞

自然はかくのごとく生きる力となり、自然は感化力を私たち人間に及ぼしていくわけです。多くの歳月を超えて、初版から版を何度も重ねていき、今日でも岩波文庫のラインアップとして輝いているという事実は、いくばくか誇りとしてもいいのではないでしょうか。

壽岳文章と戦争

しかしこのような自然というものが、もっとも相対化された姿で示されるのは、言うまでもなく戦争であります[19]。戦争という未曾有の出来事に、壽岳先生はどのように向き合ったのでしょうか。

1936（昭和11）年７月７日、日華事変が起りました。その年に神戸女学院・関西学院大学の共催というかたちで、日本英文学会が開催されました。これは英文学者、英語教育者が参加する学会で1,000名くらい会員を擁していて年一回、研究発表と総会を開くわけですが、その折の所感を記した先生の一文が残っています。

＜私自身の関与したものでは、第二次世界大戦の危機が刻々と日本へも迫った年次に、関西学院大学で大会が持たれたとき、英語聖書の各版を集めて展示し、隣の神戸女学院でも協賛の形で珍しい讃美歌集を出してもらった。その目録を作ったのは私だが、聖書を選んだことに平和への願いをこめての、一つの resistance でもあった。ところが、身をキリスト教プロテスタ

ント系の学校に置きながら、同時に大会の名において、英米二国に対し、日本の国策の正しさを声明する決議文を送ってはどうか、などと言い出す会員もおり、私をうんざりさせた。（壽岳文章「思い出を一つ二つ」『日本英文学会五十年小史』）＞

こうした参戦を是認するような発言をまえにして、何のための学問かと先生はいぶかしく思われたはずです。そして、1942（昭和17）年、すでに戦時下になっていますが、壽岳先生がいたく尊敬していた京都大学の英文学科主任教授、石田憲次は、英文学会の挨拶のなかで、次のような発言をしています。

＜戦時下に於ける英語英文学者は、かの潜水夫が水中深く潜って真珠を掴みとって来て人に示す態度、僧侶が俗縁を断って精進する意気込みをこそ堅持すべきであり、之に対し世人は寛大な眼で我々の研究の成果を待つ態度こそ望ましい。（石田憲次「昭和17年英文学会会長挨拶」『日本英文学会五十年小史』）＞

研究者は世俗から離れた存在で、特権的な位置にあり傍観するだけで、眼下におこなわれている戦争を非難するような態度は微塵もうかがえません。壽岳先生は聖書展示という沈黙に近いレジスタンスを示されました。こうした反戦の形もあるのです。向日庵私家版もそうですが、先生は愛する書籍を通じて市民として反戦をとなえました。だが、戦時中、ある意味で、それは先生を非常に孤立させていく一面ではなかったかと想像します。

壽岳文章「民芸品と平和の問題」

戦争という緊急の問題を民芸運動の関連で見ていきますと、「民芸品と平和の問題」という一文が書かれています。人間が生きるうえで何を第一義にしなければならないかという意味で、きわめて重要なので全体を読んでみましょう。

＜そこで私は言いたい。民芸運動は、それを支える堅固な土台として、平

和を守りぬく強い信念に徹しなくては、本物にならないのではないかと。日本が再軍備を始めても、それは一向苦にならないで、いわゆる民芸品をせっせと集める人。戦争を必要悪だと認め民芸品の蒐集に何の矛盾も感じない人。そういう人は、徹底した民芸運動には無縁であるばかりでなく、民芸の理念を混乱にみちびく実証者の役目さえはたすことになるだろう。さらに一歩進めていえば、民芸品の美しさはわからなくても、全身全霊を平和の確立にささげている人があれば、私はその人を、民芸品の美しさはわかっても、平和の確立に無関心な人よりも、はるかに高く評価し、はるかに深く尊敬する。（壽岳文章「民芸品と平和の問題」『柳宗悦と共に』）＞

こうした問題と関連するのですが、文章先生は「向日庵私版」というプライベート・プレス（私家版）を起こされていましたが、戦後落ち着いてきて、紙の配給も潤沢になり、経済状態が復興した頃に書かれた文章があります。それは1951（昭和26）年に『日本古書通信』という愛書家の人たちが読む雑誌に寄稿された一文です。ここでも趣味性におぼれてしまい、生きる目的に何ら関心をむけない人々を強い言葉で糾弾しています。

＜最後に、私は日本の愛書家と称する人々に、絶望を、否、ときには憎悪をすら覚える。彼らは、一般に蒐集家のもつ共通の弱点から免疫でない。人生において何がもっとも大切であるかの反省は、薬にしたくも見出せないようなタイプが、この蒐集家人種には多い。美しい書物を数多く集めることは、無邪気な道楽で、何もさしつかえないではないかと言われればそれまでで、それにとやかく干渉するつもりは毛頭私はもっていない。ただしかれらを軽蔑することは、私の自由である。私の軽蔑する人種が大部分を占めている愛書家を目あてに、私版を出すことに意義を認めないのも、また私の自由である。これをもって向日庵私版を復興しないことの弁とする。（壽岳文章「なぜ向日庵私版を復興しないか」『日本古書通信』1951年）＞

戦後日本に起ってきた、戦争に対する無反省な態度を先生は非常に訝しく思っておられました。本を「物」としてしか評価しない「愛書家」の手に渡ってしまうような私家版の存在を認めることはできない、とよくこぼされていましたが、「向日庵本が書店のショーウインドーで麗々しく飾られていた」という話を聞くのを、もっとも嫌悪されていました[20]。

向日庵の人たちは、「ことば」を媒介に伝えることを、非常に大切にする人たちでありました。だから壽岳家の人々は「ことば」というものが、戦争に関与する危険性に対して、きわめて敏感でありました。

壽岳章子と言葉

壽岳章子先生には、『日本語の裏方』というエッセイ集のなかに印象深い文章があります。日本の文学者の多くが「大東亜戦争」を賛美しました。「大和魂」でもって昂揚し、挙国一致を礼賛してやまず、散って英霊となるのが、日本国民の務めであるということがまことしやかに謳われていました。高村光太郎、武者小路実篤なども愛国心あふれる詩や文章をものしました。作家、文学者が戦争に加担した現実を踏まえて、章子先生は思慮のない情緒への耽溺がいかに危険なものであるのか、といった警告を発しています。

> ＜戦争の性格がどのようなものであれ、戦争遂行のためには、「詩」の持つ感化性が大変必要である。兵士は辞世をよみ、銃後の世界ではまた戦争文学の大きな部門として、和歌の類が華やかな振舞いをみせた。愛国百人一首が定められたり、著名作家による文集が出版されたりした。現在の歴史的視点から見れば、甚だ大きく深刻な問題を負うているいわゆる大東亜戦争というものが、どのように甘くごまかされたか、情緒が一人歩きする時、いかにお人よしで無防備であるか、そしてなぜそれ故に罪さえ犯してしまうのかということが、ありありとわかる資料に、それぞれがなっている。＞

日本文学に潜在する「滅びの美学」というものを、じつに危険なものだと、戒

めているわけであります。最初この本は講談社から出ました。そして10年後、需要があったのか、もう一度、創拓社から出るわけです。その時に書き添えられた「あとがき」がきわめて印象深いので、一緒に検討してみたいと思います。

＜もっとも、歳月の経過が現在の私の思考に何の変化も起こさなかったと言い切れもしない。たとえば本書中の佐藤春夫（軍国主義を賛美して、南方へ出征していく兵士たちを鼓舞する和歌を作り、麗々しくこうした本を出版したことに、章子先生は強い怒りを覚えた―引用者）への言及などは、少し手厳しすぎたなどとは現在思っている。彼自身の戦争中のいらだち、怒りなどを知る機会があって、要するに佐藤春夫はいささかお人好しだったのだとは思う。しかし、軽々に言っては、してはならぬことが人生にはあるのだとの思いもまたいっそう近頃の私には強いのである。それゆえに、敢えて手を加えず、原形のままにした。いずれにせよ、再びこの書を世に問うことができて私は嬉しい。私の「裏方」好きはますますその度を加えているからである。（壽岳章子「あとがき」『日本語の裏方』創拓社版）＞

こうした言葉を通じての発言、メッセージというものが、向日庵の中から、親子二代にわたり強く発信され、父娘の発言が共鳴し時代の声になっていったのです。お二人が共著で出された幾冊かの本（『父と娘の歳月』、『想父記―呼びかわす声』など）にはほのぼのとした親子の情愛のなかに、何か強靭なゆずらない姿勢を垣間見ることができます。

「向日庵」の意義―建築と思索―そして未来をつくる

では最後に、向日庵が発した内容と、それを包む建築との関連に移っていきましょう。つまり向日庵が建築史から見て、これまで検討してきたことと、どのような接点をもつのかという問題を検討していきましょう[21]。

向日庵は先ほど言及した郊外住宅運動の一環にあり、そこでは住宅改良、とりわけ女性の場である台所の改良が、声高に要求されていました。西双ヶ岡（ならびがおか）住宅展覧会が催され、「1500円で瀟洒な住宅を」と銘うたれた惹句が衆人の関心

を集めました。会場に住宅が三軒、熊倉工務店から出品されていますが、当時の目録をみますと、向日庵とよく似た住宅も展示されています。ここに熊倉工務店の熊倉吉太良の建築に対する見解が紹介されている文章がありますのでご覧ください。

＜熊倉吉太良は、後に「思いますに室温の調節、換気、照明、日照など何れも機械文明に頼り過ぎ、自然に逆らう人間生活の本質を忘れたかのような、見せる家、見る家が増えつつ在ることは悲しいことです。匠の道に今こそ温故知新、不易流行の不易、すなわち伝統を生かし流行を即ち現代性を生かし盛りあげることに思いを寄せ、技と徳を磨きつつ在る棟梁たちとその後継を目指す若人たちの御健闘を祈るものであります」と語っている。吉太良の「自然に逆らう」ことのない住宅への志は、科学的な目で日本の自然に適した住宅を模索する藤井（藤井厚二―引用者）の姿勢から大きな影響を受けたものであった。吉太良は、戦後京都民芸協会の会員となった程、民芸を愛好していた。吉太良と民芸との出会いはどのようなものだったのだろうか。…向日町（現、向日市）の壽岳邸は向日庵と名付けられ、壽岳の私版本製作の本拠地となった。壽岳邸は、真壁造（しんかべづくり）の和風の外観を現している。（石川祐一「民藝との出会いと建築の方向性」『近代建築の夜明け　京都・熊倉工務店―洋風住宅建築の歴史』）、p. 52.＞

自然と共生していこうとする建築家の姿を壽岳一家のそれと重ねることができるわけですが、通気性がすぐれた家屋というような矮小化した姿で向日庵をとらえるのではなく、「自然」との共生という大きな環境論の枠組でとらえるべきであると、私は信じます。

柳宗悦は、河上肇とともに壽岳先生にもっとも影響力をもった人物です[22]。反戦、非戦に対する強い思いも共通しています。この30年、柳自身が研究対象として、もっとも過酷な局面に立たされました。ひと昔まえは、ひたすら、柳を賛美する方向で評価は進んでいましたが、その反動か、逆に柳批判からはじめなければならないような情勢が少なからず続きました。しかし、そうした渦

中に壽岳先生の向日庵をおいてみますと、私たちはその民芸運動研究にまつわる議論、論争、批判そして、研究の進捗から多様な知見をえることができます。たとえばイギリスのクラフツ運動がはらんでいた諸問題と重なってくる部分も無視しえません。コブデン＝サンダースンが私家版制作で突き当った問題を向日庵本もかかえもっています[23]。今後はこうした諸議論が盛んになってきて、壽岳家がはらむ問題はより活性化されていくでしょう。またそのような議論が起こらなければいけないでしょう。

先ほどお配りした資料の裏面をご覧ください。向日庵には民芸の調度品が多くあります。しかし、私はここで誤解を恐れずに申し上げると、向日庵をこの民芸調の、倉敷にあるような民芸館、また駒場にある日本民芸館をひたすら模倣するような施設にしてはいけないと思います。

もう一歩進めて言いますと、先生と民芸のつながりを否定しようとするのではなく、むしろ逆ですが、先生が棚の上に民芸の壺をおいた、皿を置いた、そのお気持ちはどんなものであるか、昨今の言葉で言えば、あえて忖度することが、私たちの大きな仕事だと思います。高名な芸術家の作品が構えることなく置かれているのですが、作品そのものに何を探り、何を先生が求めていたのか、といった根本的な問題を問わなければ意味がありません。また、そうした態度なくして先生が発した問いとは対峙できないと考えるわけです。

たとえば、向日庵では句会をはじめブレイク詩をめぐる読書会、ハドソン作品の輪読会、和紙の創作教室、翻訳ワークショップや天文学講話など、多彩な催しが展開されることが可能でしょう。しかし、民芸調のつくりに敷かれた部屋の隅から何かが湧き上がってきてくる気配を感じます。最初に申し上げた「自分のうちにささやく静かな小さな声」、この小さな声はか細いがゆえに容易に消えてしまいます。そして、わかりやすいものだけが残ってしまうでしょう。だが、文化の追究、営みはこの消えてしまうか細き跡をたどっていき、さらにその跡を未来に繋いでゆくことこそが、大いなる仕事となってくるのではないでしょうか。

つまり壽岳一家がお住まいになっていた向日庵は、動態保存と同時に発信の場であらねばならないと信じています。ここに出席して下さっている皆様が向

日庵の中に入って、「自分の内にささやく静かな小さな声」に耳を傾けて、それぞれが「自分の声」で発信する、それが、私たちに託された、壽岳先生から継承する一本の、紡ぎだされた向日庵の糸ではないでしょうか。そして、この糸を次の世代に継承していくことこそが、冒頭で述べました『向日市史』にうたわれていた精神にほかならないのではないか、と私は考える次第であります。思い起こせば、壽岳先生が和紙の保存を願って、新村出、禿氏祐祥、町田誠之たちと和紙研究会を発足したのは、昭和12（1937）年のことでした。ほぼ80年前のことです[24]。今日でも和紙が息づいていますように、今から80年後に向日庵が変わらずこの地にたたずんでいることを信じたいと思います。

私の拙い話を長時間にわたり、ご静聴いただきありがとうございました。

［追記と謝辞］　上記の一文は、NPO「向日庵（こうじつあん）」法人設立を記念して行われた講演録である。講演は2017年４月30日に向日市上植野町の西向日コミュニティセンターでおこなわれた。2017年５月１日付京都新聞に「向日庵保存へ重要性訴え」という見出しのもと、設立の集いが報道され、さらに講演の概要全体は、本田貴信記者により京都新聞（2017年５月10日）紙上に「向日庵の営み　未来へ―自分の内にささやく静かな小さな声―」として詳しく掲載された。

ただここで明記しておかなくてはいけないことがある。NPO「向日庵」が設立される前、空間デザインの研究者、中村隆一先生（京都市立芸術大学名誉教授）は壽岳一家が包摂する文化的な重要性に注目し、「壽岳文章一家の文化的業績についての調査研究会」を立ち上げ、自ら会長となり数回に及ぶ研究会を開催し、その意義を啓蒙する運動を地道に努められた功績を忘れてはならない。「向日庵　後世へ残したい」という京都新聞の記事（2016年１月13日）はそうした動向を伝えている。中村先生の根底にあったのは向日庵が「構造的、文化的に見ても価値が高い」という信念で、「古里の偉人を埋もれさせてはいけない」という確信に至ったのである。また、先生は『民藝』に「壽岳文章邸の『向日庵』保存に向けてNPO設立」という一文を寄稿されている（『民藝』、平成29年11月号［779号］）。すでに京都新聞は「向日庵保存活動始まる」（2015

年９月２日）という記事でもって保存運動を報道していた。

講演の文字起こしは壽岳家の方々と交流があった長尾史子氏をわずらわせた。ここに労を多として感謝の念を表しておきたい。ただし文責はあくまでも中島が負うものである。また、壽岳文章との往復書簡を含むケラー関係資料については、芹沢銈介研究者、志田万希子氏から提供を受けたことをここに記し、謝意を表したい。ご遺族である壽岳和子氏は『壽岳潤追悼集　地上の星座』を寄贈してくださり、そしてケラー氏が潤先生に宛てた数通の貴重な書簡をご提供してくださった。また、滋賀県立図書館司書、長野裕子氏からは資料面で多大なる援助を得た。合わせて感謝の念を伝えておきたい。そして設立記念会を起こすにあたりご尽力された、国際的にご活躍されている和紙創作家、伊部京子先生、新たな壽岳家資料を提供してくださった向日市文化資料館館長、玉城玲子氏をはじめとするNPO同人の方々にも深謝の念を表しておきたい。

2017年10月現在、NPO「向日庵」の保存運動に賛同して下さった会員は百三十余名以上となり、さらに発展していくと信じたい。最後に郊外住宅文化の展開を研究する機会を与えてくださった甲南大学、総合研究所の関係者諸氏に謝辞をささげたい。

壽岳文章先生は英文科を創設し、文学部長、理事をつとめ、20年間近く奉職された甲南大学とはきわめて縁が深い方であるが、今日では「学園歌」の作詞者としてもっとも知られている。「わたしが、甲南に残したものが何かひとつあるとすれば、やはりあの学園歌ということになるでしょう。わたしにとって、あれはほんとうに気持のいいさわやかな甲南への賜りもの―置き土産になったと思います」（「わがくるま　星につなぐ―学園歌のこころ―」『一点燈』甲南学園、昭和56年）と自らも述べておられる。ご自身の居宅であった向日庵保存の重要性を説く、このような講演録が甲南大学の関係機関から資料も補足されたかたちで出版されることを先生は泉下で喜んでくださっているであろう。

注

(1)「*The Times Literary Supplement* の予約購読を私が始めたのは、1925年だったから、この週刊書評紙に親しんですでに40年以上である。これをたよりとして買い求めた

本も、相当の数にのぼるだろう。範囲も文学や語学だけにとどまらず、哲学、宗教、歴史、地誌、あるいは社会科学、自然科学など、ずいぶん多岐にわたっている。中には身銭を切って買ったのに、ろくろく読みもしないのがある。全体に通じて言えば、通読しなかった本の方がはるかに多いであろう。かえりみて空しい気持がしないでもない。

しかしそれらの本は、たとえ通読はしなくても、今日の私を形成する上に、多かれ少なかれ寄与していることはたしかだと私は思う。内容目次に目を通し、序文を読み、ところどころ本文を拾ってゆくだけでも、かならず何かが読者の見識に加えられる。だから私は、急速に老いてゆく今日でも、さかんに本を買いこむ。

青年の頃、私は藤岡作太郎博士の『国文学史講話』を読み、上代から近世までの日本文学への巨視と微視のみごとな調和に心ひかれた。藤岡博士と姿勢は違い、どことなく Taine の『イギリス文学史』を連想させる津田左右吉博士の、『文学に現われたる我が国民思想の研究』からも深い感銘を受けた。これら先人の学風にくらべると、今日の新鋭に見る英文学や英語学のそれは、微視に傾きすぎるきらいがありはすまいか。微視を包む巨視の円光。それは多彩な読書によってまず得られるであろう」（「微視と巨視」『英語と英文学』1967年 6 月号、p. 1.）。「微視を包む巨視の円光」という表現は、いかにも壽岳先生らしい表現だと思われる。

⑵　地域の文化遺産をいかに生かすかが町づくりの根底になるという指摘は貴重である。「国の重要文化財に指定されることが決まった京都府大山崎町の聴竹居（ちょうちくきょ）は京都帝国大教授の建築家・故藤井厚二氏の旧自邸。エコ住宅の先駆けとされる▼小欄で先の地元の保全活動や竹中工務店の取得を紹介したが、吉報を喜びたい。昭和初期名作群の前途にも光明を見いだせる▼藤井氏に師事した故澤島英太郎氏が設計し1933年に建った住宅が向日市にある。英文学者・故寿岳文章氏の「向日庵（こうじつあん）」だ。今は空き家だが、民芸運動の意匠を取り入れ、こちらも近代和風建築として高い評価を受けている▼寿岳氏はダンテ『神曲』翻訳や民芸運動、和紙研究の先駆者で有名。妻は随筆家の故しづ氏、長女は国語学者の故章子氏。一家の残した学問的業績と邸宅の文化価値を発信するため、ゆかりの市民有志が保存・活用や文化財指定を目指し、活動を本格化させている▼「個々の方向性は違うが、その全体像である向日庵は、非戦の誓いや人類愛、自然との共存や相互扶助の尊さを訴えかけてくる」。寿岳氏に薫陶を受け、一家の業績に詳しい中島俊郎甲南大教授は今日的な意義を指摘する▼聴竹居と似た工夫が施され、戦後は国際交流の場にもなった。地域の貴重な文化遺産を街づくりに生かし、どう未来に伝えるか。重い命題と向き合う市井の営みを応援したい」（「昭和建築　向日庵」「京都新聞」2017年 5 月28日）。

⑶　本書には郊外住宅に関する諸問題の本質が論じられ、世界各地にある郊外住宅の

多様な問題が幅広く、かつ深く検討されている。“Suburbs are an important and distinct part of modern culture, reflecting widely held insecurities largely brought on by rapid industrialization and dramatic demographic shifts. Not conforming to a single physical type, suburbs constitute a broad category encompassing many things : a political condition, a patchwork of land-use patterns, a lifestyle. At its most basic, the suburb is a pattern of inhabitation conveniently connected to the inner city but typically, although not necessarily, separate from its economic engines of production. ... Garden suburbs are valued by the public but little appreciated or even discussed by a majority of today's social scientists, planners, and architects. Recoiling against the sprawling land-use patterns and consequent environmental degradation brought about by the almost exclusive dependence since the 1940s on the automobile, these professionals have preferred to indiscriminately lump the garden suburb into a broad-based rejection of suburbanism as a whole. In deriding the suburb, the intelligentsia tends to consider only its based form —that of placeless sprawl. Moreover, these observers see the popularity of the planned garden suburb with the prosperous classes as testimony to what they deem its inherent triviality, castigating it, and indeed all suburbs, as escapist, especially for the moneyed classes. Notwithstanding the claims of many among the intelligentsia, the stereotypical view of the planned garden suburb as exclusively catering to the moneyed classes does not hold true. Many examples were deliberately conceived to improve the lot of the average white-and blue -collar worker.”（Robert A. M. Stern, David Fishman, and Jacob Tilove, *Paradise Planned: The Garden Suburb and the Modern City*［New York : The Monacelli Press, 2013］, pp. 11-12.）

(4) 文章の死後、数多くの追悼文が書かれたが、鶴見俊輔のそれほど、家庭が基礎になっていた向日庵の実態をあますところなく描いたものは少ない。家庭そのものが文章の生き方、著作を貫いているという指摘は鋭い。「寿岳文章氏が亡くなった。九十一歳。寿岳さんとおはなしする機会を得たのは三度にすぎない。しかし寿岳さんのことを思うと、いつもその家庭が心に浮かぶ。戦争は日本の家庭を直撃し貫通した。寿岳さんの家庭では、ことに二人の子達は、戦時の教育の中で、家庭と家庭外の世界とのちがいを日常生活で自分にひきうけて、重苦しい気分をしいられた。しかし、この家は、ながいあいだにつちかわれたしなやかさをもって、家庭の気風をかえずに戦争時代をたえぬいた。寿岳文章の著作を支えるのは、この家庭の気風である。岩波文庫としてはあつめの W. H. ハドソン著・寿岳しづ訳『はるかな国とほい昔』を、戦争の初期に心をかたむけて読んだ。これは自伝だが、ハドソンへの共感はその後五十年あまりつづき、今も、ハドソンの伝記を読んで、いつか彼の見た南米の草原を見たいという希望をそだてている。庄野英二氏の自伝小説を読む

と、農業学校でのきびしい作業をくぐりぬけて関西学院大学英文科に入ったばかりの著者が、大学はじめての授業で、W. H. ハドソンの『ファー・アウェイ・アンド・ロング・アゴー』（『はるかな国　とほい昔』）の講読を寿岳文章教授からうけた時の、涼しい風が吹きとおってゆくようなたのしみを述べている。庄野さんは私よりも七歳上で、やがて軍隊にとられる運命にあるが、この最初の授業のもたらしたおだやかなたのしみは、その後ながく文筆上の仕事に影響をのこした。すでに七十代なかばをこえた庄野さんの小説に、W. H. ハドソンからの、そしてまた寿岳文章からの文学の流れを私は感じる」（鶴見俊輔「壽岳さんが同時代にあたえたはげまし」『すばる』、1992年 4 月号、pp. 200-1.）。

⑸ 「本書は1921年米国グロリア・クラブ会員の為小部数を発行せられ今日早くも稀覯書となれる唯一の権威的著書たる『ビブリオグラフィー・オブ・キルヤム・ブレイク』を底本とし、同年以降に刊行された夥しき文献の記載を加えて成れるものである。最近十数年間に於ける欧米のブレイク研究熱は真に旺盛を極め殊に本年その百年祭を迎えるに際してはブレイク研究に新生面を開ける幾多の記念出版物の刊行を見た。本書はそれらのすべてをも包含せる点に於て未だ欧米にも之に匹敵すべき類書を見ない。加えるに書中挿入せる百十七の逼真精巧なる複製挿画はブレイクの全容を示して餘蘊なく、読者をして宛然ブレイク博物館に遊ぶの感を抱かしむるであろう。時恰もブレイク百年祭を迎えるに際し且又文献学の領域に於て未だ見るべきものなき我国の学界に本書を贈り得ることは吾人にとって二重の欣びである。編者壽岳文章氏はブレイク専攻の新進篤学の士、本書は氏多年の蘊蓄の結晶であり本書の存在は後代のブレイク書誌編纂者にとって力強き意義を有することを断言して憚らない。柳宗悦氏の苦心に成る善美を凝せる装幀は錦上更に花を添えるものというべく永く書斎の偉観たるを失わぬであろう。部数に限あり今後絶対に再販せず。庶幾くは此機を逸せず即刻御申込あらんことを」（「ぐろりあ　そさえての『キルヤム・ブレイク書誌』広告」『英語青年』59巻11号、p. 399.）。

この重要な書誌が刊行される経緯をここに記しておきたい。「ある日恩師新村博士から、“神戸の人にて出版界の新人なる伊藤長蔵氏、W. Blake の事に付助力者を得たしとのこと、貴所 Blake の事御研究の由に付推薦いたし置候” しかじかの來書があった。世事に疎い私は、その伊藤長蔵氏こそ、かつて関西の実業界に覇を唱えた風雲児であることも、今は著名な golfer であることも知らずに、むらさきのひともとならねど、ただブレイクの名にひかれて、約束の日、新村博士の居室で相見えたのであるが、いろいろと話をつづけるうちに、氏と私とが郷里を同じくすることがわかるに及んで、思わずも口に出るふるさとの昔がたりは、十年の知己を見るような親しさを、この初対面の二人の胸に植えつけてしまった。氏は当代稀に見る愛

書家の一人で、夙に印刷芸術に就いて深い興味と造詣とをもたれていたが、先年親しく欧米の名だたる出版業者を歴訪して、その忠言を聴き、良書の出版が他のなにより有意義なる事業であることを洞察し、帰来神戸に、‘ぐろりあ　そさえて’をひらき、洋書輸入のかたわら、年経るにつれて光をはなつ良書の出版を以て本懐とする具眼達識の士である。かくしてブレイク書誌作成の下相談は、一議にも及ばず伊藤氏と私との間にまとまったのである。

爾来私は、孜々（しし）として事に従い、能ふるかぎり多くの時間をばそのためにささげた。かかる種類の仕事に従う誰もが経験する、あの苦味と喜びの入りまじった日が、はてしなく私に続いた。そうして、着手以来十三ヶ月の日子を閲した今日、漸く本文全部の脱稿を見たのである。もとより私の‘ブレイク書誌’は、その完成に十八年の歳月を要した Keynes 博士が不朽の名著に比ぶべくもないが、またその名著なくば私の書誌は実現し得なかったのであるが、収載文献の数に於いて、私の書誌が、Keynes 博士のそれに比し、倍を遥かに超えている事実は、博士の書誌はあれど、なおこの書が決して無意義な存在ではないことを明らかにしてくれるであろう。そうして、ブレイク百年忌を記念するため昨年の末にいづべかりし本書が、遷延に遷延を重ね、遂に今日に至った罪は、予定の倍以上に達した頁数が充分に償ってくれるであろう。今にして思えば、かかる書物を半歳のうちに脱稿出版せんとする如き、実に無謀も甚だしい計画であった」（壽岳文章「序文」『キリヤム・ブレイク書誌』ぐろりあ　そさえて、昭和３年、pp. vii-viii.）。伊藤長蔵が蒐集した洋古書は、昭和10年７月28日、神戸のロゴス書店、東京の一誠堂などが札元となって、大阪書林倶楽部で売立入札がなされた（『日本古書通信』、昭和10年８月１日号）。

⑹　文章先生の書物に対する態度をもっとも集約している一文を紹介しておこう。「身近にあるものほど疎かにされやすい。書物は人間の生活になくてはならぬものでありながら、実利をのみめざして作られるためか、作る者からも読む者からもひどく粗末にされ、従ってひどく醜いものになってしまった。現今の日本ではことにそれがはなはだしいと思う。これは、書かれている内容の批評家はあっても、眼に見られ手に取られる工芸的な物としての書物への正しい批評がほとんど行われなかったためではあるまいか。それゆえ、書物とはかくあるべきものだとの批評の標準が、著者や出版者や読者に今少し本格的に理解され自覚されたならば、あたかもモリスの事業が今世紀に入って欧米各国の書物を高め美しくしたように、わが国の出版物も工芸的に多少の向上を示すのではなかろうか。私はかく考えて、書物批判の目安ともなるべき書物の刊行を久しい以前から企ててきた。しかし二つの事情が今日まで私にその実行を果させなかった。その一つは書物道不磨の聖典としてぜひとも翻訳収録さるべきコブデン＝サンダスンの書物論が、一百金以上を投じなくでは入手不可能であったこと、他の一つはかかる内容に耐える美しい活字のないこと、であ

る。しかし念願いよいよやみ難く、昨年私は思いきって英国の書肆からコブデン＝サンダスンの書物論を購入した。残るは美しい活字を創案鋳造する問題であるが、これはなお数年の労苦を待ち多大の資金を得ずば実現されないであろう。しかも時は猶予なく過ぎる。私はついに意を決し、現在あるがままの活字をできるだけ美しく活かすことをせめてもの慰めとし、他は私の理解と愛の及ぶ限りの最良の材料を最も質素に用いて上記の書物を造った。採録した三篇の書物論のうち、少なくとも私のを除く他の二篇は書物道に関する世界最上の言葉である。この内容とこの外装とをもつこの書物は、わが国現在及び将来の書物界からどんな待遇を受け、どんな影響を約束されるだろうか。それがどうであろうとも、私の愛するこの書物をいま世に送ろうとする私の心は静かである」（「わが『書物』の思い出」『本の本』1976年11月号、pp. 7-8.）。

(7)　畢生の翻訳『神曲』については、多くの賛辞が寄せられ、読売文学賞（1977年、日本翻訳文化賞、1988年）の栄誉に浴したが、詩人、大岡信の評価は委曲を尽している。「寿岳氏の『神曲』（集英社）は一昨年の『地獄編』以来丸二年で『煉獄編』『天国編』の刊行をめでたく了えた。翻訳に要した歳月は七年にわたるという。普通にこれを見れば長い歳月ということになるかもしれない。が、私には驚嘆すべき速さだと感じられる。寿岳氏がこの翻訳のために創りだした、文語の香りと張りを生き生きと保つ独特の口語文体を見るとき、それの案出のために費されたエネルギーの集中を思いみるだけでも、多病の老年に入ったこの碩学の情熱と使命感にうたれずにはいられない。たまたま福永武彦が翻訳詩集あれこれを選んで鑑賞する連載「異邦の薫り」（『婦人之友』1-12月号）最終回で寿岳訳『神曲』をとりあげ、「寿岳文章訳の出現は、画期的な事件であるように私には思われる」と言い、寿岳氏が原曲の三韻句法に対し「英断を以て三行分ずつを一まとめにして散文訳をほどこ」した、その成果をたたえている。福永氏はさらに言う。「『神曲』というヨーロッパ中世の記念碑的作品に拮抗（きっこう）するために、寿岳さんは我が国の中世の作品を博捜し、今昔物語集に始まる説話文学、軍記物語、お伽草子、謡曲狂言などの類から語彙を選び、特に仏典に基づいた単語がこの中に上手に用いられていることは驚くべきものがある」。私も同感である。付け加えれば、全編にわたる詳細をきわめた訳註が、寿岳氏のこの訳業に錦上花をそえていることを言わねばならない。詳細をきわめるが、過剰ではない。すべて必要にして十分な註である。私はイタリア語を解さず、キリスト教の真髄を知らぬ異教の徒だが、寿岳氏の訳註を頼りに本文を拾ってゆくと、ダンテの世界の複雑さに今さらながら呆然たる思いがある。つまり、この訳註あってはじめて、私はダンテの世界の真の難解さに目を開かれる思いがする。ダンテはおもしろい、などとはゆめゆめ口走るべきでないことを、ようやく知る」（大岡信「文芸時評」『朝日新聞』、1976年11月27日）。

(8) 「おしんも曾我もまだ本当に若い。これから人生の関門を幾つ潜らねばならぬかも知れない。しかしこればかりは、屹度指の間から零れる水とはならないであろう。実に沁々とした歓喜が、燃えて止まぬ静かな情熱の向うにある。何に優れずとも、その果てから、渋面をつくってしじゅう病気をしているような、やっと淋しく微笑んでいるような、困惑しきっているような人生の宿題を、最大の勝利を、いつかは心ある人々に話しかける時があるであろう。難思の国への門出にある二つの魂の喜びは、小さな室一杯に漲って、いつまでもいつまでもおしんの涙を誘うていた。/彼女の心の発足を通し、またやがて曾我の言う運命を解き放してこそ、おしんがその生涯で待ち望もうとした、人間の本質への発足は始まるであろう。深く培いて育ててこねばならなかったもの、これに依っておしんは更に新しい朝への目覚めを待とうとした」(壽岳しづ『朝』、岩波書店、昭和 2 年、pp. 301-2.)。

次に『朝』の書評を以下に掲げておきたい。主人公の一人、曽我は壽岳文章がモデルである。「婦人である著者が自らの恋愛を材料として書きしるしたらしい小説である。盲目の兄をもった妹が、その兄の友人をひそかに恋しているところから始まる。少し突然であると思った。然し読んでゆくに従って、これは作者自身の感情が高まっているせいだと考えられた。そして後には、それが全篇の overture でもあると思えるようになった。そしてその keynote が終までつづけられていた。だからこの小説は一つの叙情詩みたいなものだとも言える。25、6 頁ゆくと、この主人公が盲目の兄を東京の病院で看護する節が初まる。彼等は大阪を家郷とするらしい。兄なる人は理工科の学問の中途で目をわづらって失明するのである。失明して遂に望を失うまで、凡70頁ほどの間兄妹が互いにいたわり合い運命をなげき日々の太陽を待っては恨む心持を描いた病院生活の記録は、素晴しいできである。我々は序篇の恋愛の萌芽を忘れて、人間の上に降りかかり科学も知識も如何することの出来ない禍の為に胸をいためる。表現は引きしまって居り、描写は克明である。或る朝ふと兄の眼がぼんやり物の形色を目わけるようになる。二人の兄妹ともに我らも亦、涙ぐましくそれを喜ぶのである。けれどもそれは作者も書いている如く消えようとする燈火の最後の明るさであった。光を失った兄を、大阪から迎えに来た淋しい母と、看病にやつれた妹とが汽車にのせてつれて帰るのである。帰ってから――発病後五年ぶりに兄は神戸の或る専門学校で英文学を聴講にゆきそこの寄宿舎へ入る。主人公おしんが兄の友曾我を知ったのはその頃である。それから序篇で開かれた恋愛――おしんも曽我も互に秘めあった恋が、盲目の兄の同情者であり恋人であるらしい房乃という女性の紹介によって、初めて打ちあけられ、そして最後に住吉の郊外の初夏の樹陰で二人は初めて心の扉を一つにする。彼等の生活の朝が明ける。そういう意味であろう。私などはもっと散文的な時代に居りもっと散文的な人生を閲

して来た。こういう深く見すえた叙情的に清浄な真摯な世界に住む人々の心を羨む。彼等の生活に祝福あれ。盲いたる兄も房乃も、この一すじの恋のうしろに同じく祝福あれ」（福原麟太郎『朝』書評『英語青年』58巻6号、p. 208.）。

⑼　しづ夫人は向日庵のどのような部屋で翻訳をしていたのであろうか。以下の一文は向日庵の生活を如実に描いた貴重な記録であるので、長文であるが労をいとわずに引用しておきたい。「それにもともと学歴もなく学問もない私に、書斎と名づけられるもののある筈がなく、ただ六畳の自分の室に、本箱一つ小机一つを置いているにすぎません。この部屋は南向きで、明るく暖く、寒がりやの私には何よりです。張り出しの外縁の向うには庭があり、塀向うは隣家の庭、そのまた向うは竹薮に続いています。好ましい庭木のあれやこれに、爽かな竹の葉摺れの音に、毎朝私は机にからぶきをかけながら満ち足りた心持になります。簡素と清潔は私の好きなことで、従って私の室も飾りけなく、いつもきちんとしております。机の上や机の周囲をちらかしていてはとても落ちついて読み書きはできません」と、具体的にしるされ、このような竹林の賢人もいるのである。

さらに、向日庵の中核部の記述が続く。「廊下を挟んで私の部屋と向き合い、北側に夫の書斎の入口があります。この室は細長い板敷きで、八千冊ばかり納まる書庫と書斎が一つになっております。夫は私と異なり、学問の世界にもつながる身の上に、生来の書物好きのこととて、九年前、このささやかな家を建てる時にも、一番書斎と書物の入れ場所に心を労しました」とあり、書物がこの家の命であったことが明示されている。

書庫も書斎も苦労して設計しても、実際に使用してみるとやはり不具合が生じてくる。「書斎に書庫を続けさせましたことを、始めの頃は便利に思っていましたが、近頃では、始終必要な本の幾つかの棚以外、書庫は書斎から分離しておく方がよいと思うようになりました。と言うのは書庫が書斎に続いていますと、どうしてもほこりが書物につき易く掃除に困ります。書棚に硝子の戸を付ければ風通し悪く、紙魚の被害も多くなって書物が傷みます。書庫は書斎の次の部屋に、塵を防ぐために独立させ、日光の直射をさけ、湿気ぬよう通風に気をつけ、窓には金網をつけた方がよいと思います。蜂が本と本との間に、ねちねちした蠟のような巣をつくっていて、手を刺されたり、本を台無しにしたこともありました」。本棚に蜂の巣ができたような話は実体験者でないと話せない話題である。

通気性のいい住居は冬を過ごすのが難しくなってくる。向日庵も例外ではなく、昭和初年の住環境からいえば、こうした現実もやむをえないものであろうか。「東と北からの光線が静かで好きだと言う夫は、望み通り家の東北に書斎をつくり、北向きにテーブルを据え、もう一つ左横に辞書を乗せる小卓を置き、どちらへも向ける廻る椅子に腰かけて勉強したり仕事をしたりしております。窓の下、腰かけてい

る足の向うの板戸を開けると、ここにも網戸がはまっていて風通しがよく、夏は涼しくて暮らしよいのですが、その代わり冬は寒い室です。テーブルの下に足ぬくめの掘りごたつを入れ、膝を毛布で包み、横に手あぶりを置いても、それでもまだ、天気でさえあれば終日ほっかりと日のさす南向きの私の室の暖かさには及びません。どんなにすすめても今迄は、寒い北向きの書斎を離れなかった夫が、今年の冬は炭火の不足もありましたでしょうが、とうとう南向きの客間へ書物を運び出すようになりました」。さすがに小説家の筆だけあって、冬の厳しさに耐えかねた文章先生の姿が目に浮かぶようである。

でも、このような書斎を子供部屋にしていた子供たちがどれほどの精神的な豊かさをこうむるかは、後年、学者に育つ二人の姿を想起すれば、ある程度、環境が教育には必要ではないかとさえ思えてくる。「二人の子供――国文学を志しています十九歳になる女の子と、天文に熱中している中学三年生の男の子にとっては、家中に父の書斎ほど魅力のある室はないらしく、部屋の主の不在をねらっては忍びこみます。あちこちの書架から何か本を引きずり出しては、くるくる動く椅子に腰かけて読むのがよっぽど楽しいらしいのです。勝手に出すな、読みたい本があれば言うようにと、叱られても叱られてもはいりこみます。そうして『ちゃんと入れておくのに何故さわったことがわかるのかなあ』と男の子などは小首をかたむけております。書斎にはいることや本をいじることについて、くり返しくり返し夫が子供達に言う小言を、亦かと私は、うるさいようなほほえましいような気持で聞いているのですが、子供に向かって夫と同じ言葉をくり返し、子供のいない時夫に向っては、『それでも本に目もくれない子供達だったら困るでしょう』と申します」。章子、潤両先生の幼き日の点描であるが、向日庵のひとつの情景である。

最後は美しい言葉で締めくくられる。「時たま私共が、子供二人に留守をさせて外出し、夜更けて街路樹の多い暗い道を、急ぎ足でわが家へ近づきます時にも、きまっていつも、あかく暖かく夫の書斎には灯がとぼっております」。ここにある「あかく暖かく」灯るものは何であろうか。むろん電灯の明りではあろうが、向日庵の温かさでなくて何であろうか（壽岳しづ「書斎について」『書斎』昭和17年10月号、pp. 20-22.）。

壽岳文章による W. H. ハドソンの紹介は、『はるかな国　とおい国』を翻訳としてではなく、学生が英語を学ぶ教室で使用する教科書（*Memories Sad and Sweet,* 平野書店, 1931）という形で出版された。たしかに学生一般に向けた学習参考書ではあるが、この教科書は最初の「学生」であるしづ夫人のために編まれたものではなかったのか。誤解を恐れずに言えば、教科書のかたちをした「恋文」であったかもしれない。また後年、大幅な注釈をつけて、各章ごとに説明を加えた壽岳文章

『自然・文学・人間―W. H. ハドソンの出発』（新日本出版社、1973, 2002）がある。

⑽「2011年９月14日に亡くなった寿岳潤さんは、1927年９月19日生まれ、京都府立一中４年終了、第三高等学校を経て、京都大学理学部宇宙物理学科を1950年３月に卒業した。その後大学院で勉強していたが、難関であった米国フルブライト留学生試験に合格し、1953年氷川丸でアメリカに向かった。同乗者であったのが、（ノーベル物理学賞の）小柴昌俊、木村資生（集団遺伝学で中立説を唱えた人）氏などであった。アメリカでは、ミシガン大学の大学院で、L. H. Aller 教授のもとで勉強し、さそり座 r 星、B 型星などの恒星大気の研究に励み、1957年に博士課程を修了し、58年に Ph. D. の学位を得ている。

帰国して京都大学に戻り、湯川博士のノーベル賞を記念して読売新聞社が創設した湯川記念奨学金を受け、林忠四郎先生などと大質量星の進化などの研究を行っている。1958年にはアメリカ・カリフォルニア工科大学の研究員となり、W. L. W. Sargent などとともに、恒星物理の研究に従事してきた。そして、ケンタウルス座 3A に、初めてヘリウムの同位元素 ^{3}He を発見している（1961）。また R. Cayrel との共同研究で、晩期星大気の有名な論文（1963）がある。帰国し、1963年東京天文台分光部に東京大学講師として採用され、64年に助教授に昇任した。東京天文台での初期の仕事の一つは、小田稔さんがすだれコリメーターで概略位置を決めた X 線天体はさそり座 X-1 を、光学的同定を岡山天体物理観測所の188 cm 望遠鏡により成功したことで、その端緒を見いだしたのは寿岳さんである。

日本天文学界でも活躍の場を見いだし、1963-67年、1969年-89年の24年間にわたり PASJ の編集理事を務め、PASJ の論文の質の向上に多大の努力をし、国際的水準に達した PASJ の基礎を築いたのは寿岳さんである。筆者も同時代に編集理事をやっていたが、寿岳さんのはプロの編集者なみの仕事ぶりで、筆者が導入したレフリー制を実りあるものにしたのも、寿岳さんの功績である。また日本の Japan Skeptics の創立者の一人で、初代会長であった。1987年に日本で、「Star Forming region」の IAU のシンポジウムがあったとき、Proceeding の編集をしている。1970年代からの日本の大望遠計画の議論では、海外設置の必要性を強く主張した少数派の一人である。東大教授に昇任したのは遅かったが、1988年に東京天文台を定年退職してから、東海大学文明研究所の教授を勤めていたはずである」（古在由秀「壽岳潤さんを偲ぶ」『天文月報』第105巻第２号、2012年１月）。

⑾　潤先生の言葉には父、文章先生と酷似した側面がある。「文明の進歩は、人間の生活圏の拡大とエネルギー利用量の増大をもたらした。とくに急速な伸長を見せた科学技術文明は、自然界に対する人間の大規模かつ複雑なコントロールを可能とし、少なくとも物質的には人類社会に多くの恩恵をもたらした。しかし、地球圏が生態学的な準開放系として、人間のさまざまな生活活動の自由を保証した時代は急速に

去りつつある。もはや地球圏は有限な閉鎖システムとして、環境に対する慎重な配慮なしには、人類文明の存続さえ危ぶまれる状況に直面している。60億を超えた人口と、その生存を保証する人権を確保しながら、有限な地球環境との折り合いをいかにつけるか。地球文明の未来を考えることは、科学技術文明の役割の再点検はもとより、旧来の社会思想の枠組みの変更をも視野に入れざるを得ない、人類社会にとって重大かつ緊急の課題なのである」（壽岳潤「宇宙文明の扉」、佐藤勝彦他著『思惟する天文学　宇宙の考案を解く』新日本出版社、2013年、p. 158.）。

⑿「ここでケラーの人柄に少しふれておこう。彼と私との間にとりかわされた手紙は数百通にものぼるであろうが、私たちは互いに一度も会っていない。私は出不精で、未だに海彼の地を踏んだことは無いし、ケラーは古きよきものが刻々に失われてゆくらしい日本の現実を見て、幻滅を感じたくないと言うの計画している『向日庵版絵本どんきほうて始末記』にでも複製したいと考えているが、なるほど『ドン・キホーテ』に打ちこんだだけの、実にヒューマンで格調高い風丰である。（因みに私のは、ケラーの希望で、洋服ではなく羽織袴に威儀を正した姿である）」（壽岳文章「古典と挿絵―芹澤絵本どんきほうての意義―」（ギャラリー吾八『これくしょん』第61号、昭和50年）。「私は型染めでいろいろの本を作ってきました。型染めとはもともと古来からある染色の技法です。型紙を用い、くり返して長い布に文様を染めますが、この連続した文様の部分を切りとると、一つの工芸的な絵が生れます」（芹沢銈介「私家本」『朝日新聞』［昭和36年６月14日］）。

「私は熟慮の末、柳宗悦・河井寛次郎先達ともよく相談し、芹沢銈介君に白羽の矢を立てた。その結果については、改めて言うまでもない。芹沢君の苦心と勉強も大変なものであったが、この調子でやってみたいという、見本の合羽刷が一枚できた時、早速それをケラーに送ると、ケラーは驚喜し、これこそ私が夢に描き、ひそかに期待していたそのものずばりだ、との返事。そして、事実芹沢『ドン・キホーテ』絵本は、ケラーの数多い蒐集の中でも、その目録解説に特記されている通り、断然光を放つ存在となっている」（壽岳文章「古典と挿絵―芹澤絵本どんきほうての意義―」）。

「ここから、芹沢『ドン・キホーテ』挿絵がなぜすぐれているかの本質論は展開する。それをまとめると大変な長さになるので、ただ一つ肝要な点に触れるだけで擱筆する。『神曲』と『ドン・キホーテ』は、私の最もすきな古典であるが、それはこの二つの作品とも、古代を照らし、近世へ架橋する中世を母胎としているからである。ところで、日本には、その質において西洋のそれに優るとも劣らぬ中世があり、それを母胎とする多彩な芸術活動があった。本の方でいうと、奈良絵本や丹緑本もその系譜の上に立つ。芹沢君は、『ドン・キホーテ』の絵解きを行なうに際し、この方面の勉強に心をひそめた。芹沢絵本どんきほうての、あの尽きぬ魅力の

秘密を解く鍵の一つはここにあろう」（壽岳文章「古典と挿絵―芹澤絵本どんきほうての意義―」）。「『どんきほうて』は、意外な課題だったが寿岳さんの海のような寛容でどうやらまとめることができた」と芹沢も感謝をかくそうとはしなかった（芹沢銈介「私の仕事」『限定版手帖』８号、昭和27年）。

カール・ケラーとの交友を示す壽岳書簡をここに紹介しておきたい。向日の地に転居し、向日庵私家版を開版し、「茶の実」を印として採用したことばかりか、壽岳文章本人の人間性がにじむ重要な言及が数多く含まれているからだ。

「京都近郊、向日町、上植野　1933（昭和８）年10月21日
アメリカ、マサチューセッツ州、ボストン、フェデラル・ストリート80番地
カール・T・ケラー様
わが親愛なる父のごとき友へ
長きにわたり私から便りがないために何か身辺に起きたのでは、とあなたはいぶかしくお思いではないでしょうか。どうかお気持ちを乱さないでください。私は何ら変わらず元気にいます。ただこの数カ月間、新しく転居をしたため（住所は上記をご覧ください）、また、仕事が多忙をきわめたゆえに、そして英語という言語を駆使するのが私ども外国人には不慣れなため、今したためているお手紙が延び延びになってしまいました。むろんこれは私の意志に反します。私のことを熟知しているあなたですから、無沙汰をお許し下さるでしょう。

世界は病み、きわめて危険で破壊的な事態になり、狂信的な状態に陥っています。新聞の紙面は忌まわしい報道で埋め尽くされていて、眉を顰めざるをえず、とうてい読みかねます。賢者が軽蔑し、無知な学徒だけがつつみ隠さずに拍手するようなことが、この主戦論が横行するような現代には大いに歓迎されます。そして賢者よりも学徒の数がはるかに上まわることをたえず想起しなくてはいけません。これは由々しき悲しい事実ではないでしょうか。世界情勢はきわめて複雑でとうてい一語では表現できかねますが、私がかたく信じ、躊躇なく言いえることは、人間はあまりにも自意識にとらわれすぎているのではないでしょうか。心の謙虚さを欲しているのですが、天の審判を恐れようとはしません。やがて私たちのなかに秩序を求める精神がみなぎってくると信じたいものです。あなたは腹立たしい思いでこの社会情勢を見つめているのではないか、と私は拝察しています。

今日、あなたが私にしてくださった身に余るご親切への感謝として、向日庵本の『無染の歌』をお贈りします。すべて私が手ずから染色をほどこしたものです。ま

た妻がひとりで染色してくれた『セルの書』も私ども夫婦の献辞をつけて進呈したいと念じています。永田寛が日本で書いたドン・キホーテの小論、私が書き下ろした『出版の歴史』という小冊子も合わせて、そして私と妻、子供ふたりの肖像写真をも同封しましょう。リチャードソン氏の写真の腕を疑うわけではありませんが、この写真だけで私のことを判断するならば、かなり曲解されてしまうのではと恐れています。じっくりとご覧になり、お好きな骨相学を駆使して鑑賞してみてください。さて、あなたと奥様が写っている写真をお送りくださいませんでしょうか。鶴首の思いでお待ち申し上げます。私は1900年3月21日、妻は1901年9月21日生まれです。だから生まれた順序から言えば、あなたは私たちの「父親のような」存在です。もちろんこの形容詞は精神的な意味で用いています。たえず私には慈愛に満ちたやさしさで接して下さるため、あなたは精神的には私の父親と思えてくるのです。父と私の関係は不幸なものでしたから、いっそうそのように感じるのです。

最近、『ドン・キホーテ』の中国語訳が上海の新聞に掲載されているとの情報が中国人の友人からもたらされました。すでにご存じでしたでしょうか。この掲載版を入手しようとしていますが、まだ果たせていません。ごく最近、この掲載がなされたと思います。

今春、愛すべきふたりのアメリカ人と会う機会がありました。リチャードソン氏とはじつに愉快な日を過ごしました。ダート・ハンター氏と世界の手漉き紙について語りあい、忘れがたい時間を過ごしました。愛書家は愛書家とすぐに打ちとけるものです。ハンター氏はあなたが出版する本の購入予約者になってくれたと喜んでいましたが、これはうれしい限りです。ハンター氏とは友誼を重ね手紙を交わしています。

かなり昔から、ニュートンの『書籍蒐集の愉しみ』を捜しているのですが、いまだに入手できずにいます。高価な本なのでしょうか。貴国でまだ容易に手に入るようでしたら、どうか一部ご購入していただけませんでしょうか。何卒よろしくお願い申し上げます。

私も含め、妻と二人の子供もすこぶる元気でいます。当地は京都近郊でも健康にいいとされている土地柄です。地名の「向日」とは「太陽と面する地」という意味です。たしかに他の地域と比べて、どうも当地は日差しが豊かなようです。だから私が立ち上げた出版所は「向日庵」と称し、文字通り、「日に向かっている出版社」なのです。また当地は茶栽培が盛んな土地柄なので、わが出版物には「茶の実」を

刻印しています。また小さな住居ですが、この家は私たち自らが考案しました。この案を実現するには多大な費用がかさみ、多年にわたり多額の借金を支払っていかねばなりません。だが、自分の家屋、家庭をもつことは何とも言えない「甘美な」気持ちになります。私たちは満ち足りた気持ちで暮らしています。私たち家族がどのような日々を過ごしているかを知れば、あなたはきっと喜んで下さるでしょう。訪日のご予定がないのをじつに残念に思いますが、自ら設計したつつましやかな書斎であなたとお会いできれば、どんなにうれしいでしょうか。あなたとご令室様へ

私と妻から敬愛の気持ちをこめて

壽岳文章（英語署名）」　［ハーバード大学ハウフトン図書館蔵］

英文学者として英国への留学体験どころか、壽岳には海外渡航の経験がなかった。なぜ行かなかったのかという理由として、「義務的に行かねばならぬ年代に戦争とぶつかったものですから。私と同年配の英文学者にはそんな人がおおい」という物理的な理由を挙げている。だが、「このごろ向こうから来いという案内を受けているが、家内と一緒に行ける、いい健康状態といい気候をねらっています。イギリスへ行っても、故郷へ帰ったようなアット・ホームな気分になれる自信はある。だから強いて行かなくてもいいということになるのでしょうかね」（「著者との１時間」『朝日新聞』昭和36年９月８日）と述べ、英国への渡航する可能性は多々あったが、あえてかの地に歩を踏まねばならないとは考えていなかったようだ。「家内と一緒に行ける」という言葉には妻をたえずいたわる文章のやさしさを感じる。

⑿　今日でも名著の誉れ高い『ブレイク』（研究社英米文学評伝叢書　第31巻）のなかで、大乗仏教とブレイクの東洋的思想の類似が強調される。「ブレイクが私の心を惹く第一の点は、彼の思想が甚だしく東洋的、殊に大乗仏教的であることに存する……預言詩の多くに見える逆説的なブレイクの思想は、直指人心の想像力に恵まるること少なき西欧人には、概して甚だ不自然と思われるであろう。しかし逆説を尊ぶ東洋思想に長い間訓練されてきた我々の耳には、ブレイクの説く所は甚だ自然であり甚だ近い。幼い時から大乗仏教の経典に親しんできた私が、ブレイクに特別の愛著を感ずるのはまことに当然である。

大乗とはあらゆるものを摂取して捨てざるの謂である。ブレイクは大乗仏教的なるがゆえに、極めて肯定的であり、積極的であり、生命的である。法則によってのみ律せられる小乗的な世界は完全に揚棄せられて、大膽（だいたん）な衝動をそのままに肯定し美化し荘厳して一切智の殿堂に到らしめる教えを、十九世紀初頭の西欧に於いて、ブレイクほど力強く熱心に説いた人は数多くあるまい。『般若理趣経』に見える『慾箭静浄句是菩薩位』の真意義は、‘arrows of desire’（欲念の矢）を射るブレイク

に於いて最もよき理解者を得ているのではなかろうか。我々は死者の骸を踏みこえて生命の川に身をすすがねばならぬ。『生命あるものは凡て神聖である』とはブレイクが屢々繰返す強い確信である。

しかしブレイクに於ける生命の肯定は、他を犠牲にしてまでも自己の慾望を充足しようとする利己的なものでは決してない。生命を愛すればこそ、彼はあらゆる種類の残虐行為を憎む。一羽の駒鳥が籠に閉じこめられることすらも彼の心を傷ましめ、一匹の蟻が道に迷うことすらも彼の腸（はらわた）を断たしめる。この世の有情非情は、みなブレイクの心の眼に人間の神聖な形となって現れる。山川草木が悉く人間にほかならないのである。かくしてブレイクの思想は『罪の赦し』と『我の寂滅』とを基調とする大悲の仏心に昇華して已む」（壽岳文章『ブレイク』研究社、昭和 9 年、pp. x-xv.）。

⑭「京都の私が最も親しくつきあっていたのは、京都に住み、大阪の英国総領事館に勤務していた俊敏な若いイギリスの外交官で、戦後数年にして駐日英国大使となって来任したジョン・ピルチャーである。反英感情が高まる一方の戦前ぎりぎりまで、日本に居やすいようにと、私は彼との交遊を純粋なものにし続けた。その気づかいを彼は身にしみて感じ取ったと見え、敗戦の年の十二月、戦後処理のため僅か数日日本へも派遣されてきた時、わざわざ属官をつれて私の家へ来、「わが国はアメリカのように設備その他で金を惜しまず使えないが、最高に適格の文化使節エドマンド・ブランデンを送るから、君も彼と一体になって、仕事がやりやすいようにしてくれ」と頼んで帰った。これがきっかけで、ブランデンと私の間に親交が始まる」（壽岳文章「エドマンド・ブランデン詩選集『東方へ』」『本のひろば』284号、1982年、p. 13.）

壽岳文章が交流した英国人として著名な作家エンライトの名前を逸するわけにはいかない。英文科の主任教授としてエンライトを甲南大学へ招聘したのは壽岳自身であった。「戦後ややおくれて出発した甲南大学では、とりわけ長い間放置された英語や英文学の空白をうめるために、一流人物の推挙をブランデンに依頼した。その結果、1951年ケンブリッジ大学出の若い詩人エンライトの来学となった。このエンライト、今でこそ詩人・批評家・小説家としてイギリス文壇の中堅的存在の一人となっているが、当時はフランス生まれの夫人マドレーヌと、まだ赤ちゃんのおもざしの残るドミニック嬢と、著書としては二冊の詩集しか世に出していない青年であったが、ドイツやフランスの文学にも通じているので、私は毎週一時間、文学のためと語学のためのと、それぞれ教師を対象とする講座を設け、神戸大学や神戸外大の教官にも呼びかけた。意外の好評であったが、目標とした甲南大学自体の教師はほとんど顔を出さず、神戸大学や神戸外大の教官が熱心に聴講し、得るところも多く大いに喜んでもらえたようだ。私自身は、エンライトの希望で、これも週に一、

二時間、彼の部屋か私の部屋で、『冬の日』と『猿蓑』の講読（？）をやったが、察しのよい英詩人も、急に飛びこんだ芭蕉の俳諧の世界には、少なからず戸まどいを感じ、覚えたての日本語、『ムツカシイ』を連発した」（壽岳文章「D. J. エンライトの『露の世』」『本のひろば』285号、1982年、p. 13.）。ちょうど30年後に同じ甲南大学文学部英文科に着任したディヴィッド・ライクロフト教授は、エンライトと日本について興味深い一文（David W. Rycroft, “The Year of the Monkey — In Memory of D. J. Enright 1920-2002,” *The Journal of Konan University,* 2003, pp. 37-76.）を記している。なお壽岳によるエンライト招聘については、「寿岳文章」、中島俊郎編著『岡本　わが町』（神戸新聞総合出版センター、2015、pp. 86-90.）を参照のこと。

⑮　向日庵におけるヴァイニング夫人との関係は資料に乏しいが、文章の一文はその間の消息を伝えていて貴重である。「何がきっかけで、ヴァイニング夫人と親しくなったか、私には正確な記憶が無い。しかし戦後間もなく、彼女が皇太子傅（ふ）として来朝した時、彼女が私を知友の一人に数えていたことはたしかだ。京都での彼女の宿は、この古都でも最も古風な俵屋ときまっていて、私たち夫婦はそこへ招かれて夕食をともにしたし、そこから宮内庁さしまわしの古風な黒塗りの車で、桂離宮や、離宮から近距離の私の家へ来て、楽しい語らいの時を持ったことが、昨日のように思い出される。

　ヴァイニング夫人は、私よりたしか二歳下で、少し大げさな表現だが、「百年の知己」感がすぐ生じたのも、相似た精神の成熟度によるのかも知れない。アメリカでは最も正統のクェイカーの流れを汲んでいる人だが、来日と同時に、一冊の本が私のもとへ郵送されてきた。それは粗末な紙に印刷された B6 判六十頁あまりの、青色紙表装の簡素極まる小冊子だったので、私は深く意にもとめず、未整理のままどこかへしまいこんだ。そのうち夫人からあの本は無事届いたかとの便りがあり、初めて私は、それが夫人会心の作品なのを知り、正直に、どこへ入れたか判らぬので困っていると答えたところ、重ねてまた夫人から送られ、一読して私は驚いた。詞花集のたぐいは、英米でも日本でも、掃いて積みあげるほど多種類出ているが、ジョージ・ハーバートのような国教徒詩人であれ、ホプキンズのようなカトリック詩人であれ、宗派的な眼鏡は一切あてずに、詩と宗教の本質的なかがやきだけに正確な照準をあて、他に類を知らぬみごとな私解を、夫人は含蓄の深い簡素な言葉で適切に加えているのだ。以来、私は大学での英詩の講義には、この本を使うことにきめ、多年に及んだ」（（壽岳文章「私解のついた詞花集」『本のひろば』283号、1982年、p. 11.）。

⑯　壽岳先生は折にふれ再三再四、索引の重要性を説いているが、具体的な活用法を以下のように考えていたのである。「獄中日記の場合にも言ったことであるが、こ

の娑婆日記にも夥しい人物が登場して、さまざまな人間模様を描き出し、染めあげ、織り成してゆく。これもまたまさしく、河上肇を本尊とする微細画仕立ての曼荼羅なのだ。そして私は思う。河上の没後、すでに幾つかの評伝が出版され、その中には異色の出来のも見出されるが、河上肇研究は今後ますます盛んとあるであろうし、またそうならねばならない。そのために、私はここでひとつの重要な提言をしておく。今後の河上肇研究のために、本全集を底本として、索引を是非とも作っていただきたい。索引は、マルクス主義経済学者としての彼の学問的出発と到達を知るために、著作や講演の全般にわたるのを理想とするが、まずその人間像をあらゆる角度からとらえるために、自叙伝や日記や書信の索引作成を第一の課題としてほしい。私はこの解題執筆に際し、再度にわたって日記を読みかえし、途中、感慨にふけりすぎ、名前だけが出てくる人物の往時を、私なりに再構築するのにかなりの時をすごした事実にかんがみ、索引の必要を力説する。ついでに言うが、私の多年にわたる提唱にもかかわらず、日本の出版界では、索引の使命や必要が、軽視あるいは無視されすぎているのではなかろうか」（壽岳文章「解題」『河上肇全集』第23巻、1983、p. 728.）。なお、1990年、文章は物集索引賞特別賞を受賞している。

⑰「私は二十数年前から京都西郊の向日町に住みつき、阪急電車の京都線を利用して、大阪や神戸に出かける平凡な勤労者の一人であるが、淀川を中心に南北の丘陵が迫ってくる山崎から水無瀬にかけての風物は、いつ見ても好ましい。近頃めっきりふえた俗悪な広告掲示さえなければ、もっとも気持のよい窓外風景の一つだと思う。/ あそこの景観の美しさは、純粋に日本古典的なものであるが、山崎の谷あいに建っているサントリー醸造場の異国風が、歳月のさびを身につけたとでもいうのであろうか、いまはすっかり土地になじんで一段と景観をひきたてている。往きかえりの電車の窓から、私は必ずあの褐色の二基の望楼めいた建物を眺めては、まるでお伽噺に出てくる魔法の家をでも見るかのように、不思議な郷愁をそそられる。どんな風になっているのか行ってみたい気がしてならないのである。/ やがて例の醸造場が見えたとき、私はちょっと車をとめて、君の好物はあそこで作られると説明したら、詩人は目を細めて喜んだ。そうだ、寿屋の方へ連絡して、ちょっと見せてもらう手はずをしておけばよかったにと、私は後悔した。/ ブランデンはサントリーがすきなのである。朝、彼の部屋へ行ってみると、あの角びんを机上の一隅に据えて、ちびりちびりやりながら詩を書いている姿を、私は幾度か見た。そして笑いながら「僕にはどうも数々の悪徳があって……」といってみせ、私にもすすめてくれるのが常だ。彼がいるとどんなに純日本風な宿屋でも、サントリーを媒介としてイギリス的な生活の雰囲気がかもし出されるのを、私はこのもしく思った」（「詩人とサントリー」『洋酒天国』昭和32年14号、pp. 7-8.）。

⑱ 環境問題を歴史的な視座から検討したキース・トマス『人間と自然界―近代イギ

リスにおける自然観の変遷―』（中島俊郎他訳、法政大学出版局、1989年）はすでにエコロジーを検証する古典としての地位をえているが、トマスは日本における感性の推移に対して鋭く問い直しをしている―「動物の取り扱い方、景観の形成、人間と周囲の自然界との本来的な関係は、全世界の人々にとって、今やこれまでになく緊急の意味をおびた普遍的課題となっている。とりわけ日本人は、自然にたいする深い畏敬の念と、居住環境の野放図な工業開発とを同時にあわせもつ点で、注目をあびている。じっさい、日本では、西欧でいう田園、カントリーサイドがほとんど消滅してしまった、と聞く。本書の最終章で注意を喚起した『人間のジレンマ』は、だからロンドンでも東京でもいずれにせよ痛切な問題をつきつけているはずである」（日本語版序文）。

⑲　英文学者、宮崎芳三（神戸大学名誉教授）は、壽岳文章の、静かであるが強靭な反戦態度を太平洋戦争のなかで平和の孤塁を守る表明として高く評価している。「寿岳の沈黙は、つよい意志の力で、すすんでえらびとられた態度であった。それは用心深い人のことなかれ主義から出ただまりこみではなかった。両者が区別つかないと言う人は、闇の中で声を立てなければ、ライオンも猫も同じだといっているに過ぎない」…「生きてゆく上にひしひしとつながってくるのは、もう一昔以上も前に始まり、年と共に強まる西欧中世への愛です」と言う。いまの日本への愛など、年とともに小さくなって、もうほんの断片しか残っていない、と彼は言いたげである。『私は、文学と言わず工芸と言わず（中略）中世精神の深淵のたとえ一隅をでも窺い知ることにより、自分の生活をも鍛え深めてゆきたい、といつも考えております』と言う。私はこの中の、とくに『自分の生活をも』と彼が書いている点に注目する。彼は、心の中でただ『思慕』をつのらせるだけでなく、実際の暮らし方をも、その思いの方向へもっていきたい、と言うのである。たとえ頭の中では反世間的であろうと目前の暮らしはソツなくやっていくというのではなく、寿岳は、その考えと生活と全部含めた丸ごとの全存在をあげて、そのときの日本を向うにまわしそれと対立しているのである。彼はヨーロッパ中世に対する『このような傾倒が、何か研究めいた形をとって現れる日があるかどうか。それは私の心から遠い問題です』と言う。中世を研究してひとつ論文を書いてやろうというのではない。そういうレベルの話ではなくて、これは自分の生死を賭けた問題なのだ、ともし彼が書いたにしても、それを誇張だとは私は思わない。（中略）

　寿岳はこの短い文章の終りに、書いた日付として昭和18年２月13日、としるしている。その月、日本軍のガダルカナル島からの退却が終了した。地上戦闘の戦死者餓死者合わせて二万五千人、あと二年半、日本は惨憺たる敗北戦を戦うのである。こういう戦いを戦いぬくのにも勇気がいるが、他方、決意を固めてそれに背を向けるのにもまたかくべつの勇気がいるのである」（宮崎芳三「壽岳文章の沈黙」『太平

洋戦争と英文学者』研究社、1999年、pp. 107-9)。

⑳ ケラーとの交友は壽岳に新しい学問的可能性を与えた。文章がブレイク研究に新境地を拓けたのは人間的なつながりに多くを負っているが、学問は人なりという感を強くする。そして書誌学と文学研究が結びついたもっとも幸せな学際をここに見る。「しかし、私の学位論文となった『Blake の *Note-book* の書誌学的研究』というのは、McKerrow 先生の書誌学を適用したのです。実は本物を直接自分の目の前に置きたかった。その *Note-book* の原物はアメリカへ渡っており、その所有者の Mrs. Emerson は幸いにも私の親友の Carl Keller と親しい。Keller というのは Harvard 出の実業家で Fogg Art Museum の理事をしており、*Don Quixote* の世界的な collector です。私の向日庵私版本のなかでいちばん評判の『絵本どんきほうて』は、Keller の頼みでつくったのです。その Keller を通じて実物の借用を申し込んだところ、鉛筆のあともだんだん薄れ、非常に傷んでいるから国外へ出すのは危険だというので、しかたなく Keynes のつくったコロタイプ版の複製をもとに、Keynes くらいの仕事は自分にだってやれるんじゃないかとの意気ごみで、顕微鏡だの何だのを使いながら、克明に調べていった。すると Keynes の見逃しておったようなことが、だんだんわかってくる。そのときはうれしかったですね。それを論文にまとめたんです。ところが、戦争中ですから私のやっている仕事は向こうではわからない。向こうでも、もう故人となった Oxford の Margoliouth が、同じようなことをやっとったらしい。ですから、私の仕事をいちばん学問的に高く評価してくれたのは Magoliouth で、戦争中、アカデミックな交流が皆無なのに、よくこういう仕事をやったとほめてくれましたよ」(福田陸太郎「学問と人生と美の探究者—壽岳文章」『さまざまな出会い—対談・鼎談・会見記—』中教出版、昭和62年、pp. 57-58.)。

㉑ 向日庵という自宅について文章自らが語った一文は少なく、家屋の施行から地域周辺まで紹介しているこのエッセイ「家について」は貴重であり、また掲載誌『家』は、全国の図書館にはほとんど収蔵されていない稀覯書である。

「家について」

壽岳文章

大毎の京都支局から、『京郊民家譜』正続二編が先年出版された。京に田舎ありで、下鴨の社家屋敷や、西の京あたりをぶらぶら歩いていると、日々に変わってゆく都会の顔の中に、思いもかけず昔のままの民家を見出して驚くことがある。『京郊民家譜』は、そういう家をカメラでとらえて、これに専門家の説明を与えたものであるが、なかなか楽しい図譜である。殊に今私の住む向日町界隈、すなわち西山の民家も多数収められているので、私には余計親しみが持てる。

専門家の説に拠ると、京都はさすがに永い間王城であった土地だけに家屋にあらゆる建築の形式や技法が採り入れられた、日本全国の建築様式が、京都とその附近には言わば遺形のように残っていて、それらを見て歩くだけでも随分と家の勉強になる。とりわけ西山は、京都近郊のうちでは、一番純粋に古格を保っているので美しい家も多い。そう言われてから、私は自宅の近くを散歩する折や、または家族づれで大原野や善峰あたりへ出かける二、三時間の山行きに注意して家の立たずまいを見るようになった。なるほど美しい農家が多い。殊に秋の初めの強い夕日を受けて、前庭に植えられた花ものや畠ものの葉がそれぞれの光と色を吝みなく出して見せ、みずみずしい竹薮の緑が何ともいえぬ金色を呈する時など、思わず吸い寄せられたように、私の足はじっと立ちとどまって動かなかった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

私どもの住んでいるこの家は、七年ばかり昔、故藤井厚二博士の門下でいま官省に入って国宝建築物調査などの仕事をしている澤島工学士に、設計、監督をひきうけてもらった。当時、南禅寺の家には手の離せぬ病人があり、何かと忙しいので、現場へは数回しか来なかったかと記憶する。しかし澤島氏と工務店の骨折りで予定の通り建った。何しろ安い予算なので、それはいつか本誌に山村酉之介氏が紹介されたほど立派なものでは決してなく、「壽岳のガラス家」などと称する口の悪い友人もいるが、結構私どもは満足してこの家に住んでいる。よくあの時思い切って建てておいたとさえ今は思う。

だが、この土地に居着いて、周囲の民家の良さがきわめて自然に判ってくるにつれ、もしもう一度この土地に自分の家を建てる機会に恵まれるなら、こんどこそ始から終まで自分が監督して、周到な用意と構想のもとに、もう少し自分の性格を出した家を作りたいとの夢を描くこともある。その夢に描かれる家は多分に民家のよさを――第一に材料の建實さを取り入れたものであり、重厚、篤実な感じが溢れるものである。

林達夫氏は、古い民家を改造して読書人のための立派な家に仕上げられたと聞いているし、それに似た試みはこの雑誌でも紹介されたかと思う。しかし家族の一人一人が書物を読んだり物を書いたりすることを条件とする私の家では、各室はある程度まで完全に独立した存在であらねばならず、かつ相当数の蔵書があるから民家をそのまま利用するわけにはゆくまい。家はそれぞれに用途の制約を受ける。過去三年間、北は秋田県から南は鹿児島県まで、ほとんど隈なく日本全土の田舎を旅行して、地方、地方の民家の美しさに打たれ通してきた私たちであるが、例えば養蚕を目的として発達した奥羽東北の二階造りの民家を、いかに外観が美しいからとて、そのまま我々の生活にとり入れるわけにはゆくまい。風が強く吹きすさぶ地方にあっ

てこそ、家の三方又は四方を囲む、あの常緑樹の亭々たる並木は必然の美しさをもつけれども、京都のように風はあまり吹かずに底冷えのする土地では別の考え方があってもよいはずだ。土地に即し、職業に即し、そして人格と良心に即してこそ美しい家であろう。（住宅文化研究会『家庭文化住宅雑誌　家』〔昭和16年２月号〕、p. 27.）

［ハーバード大学ハウフトン図書館蔵］

⑵　壽岳は人間河上肇のなかに透徹したゆるぎなき精神を見てとり、深く尊敬の念を寄せていた。「時局は日ましに苛烈さを加え、河上が独居自炊生活を始めた昭和18年７月以降だけに限ってみても、国民徴用令改正（実は改悪）の公布、女子学徒動員の決定、綿・スフなど紡績業の軍需工場への全面的転換、二十五歳未満の未婚女子を勤労挺身隊として総動員、理工科・教員養成系学生以外の徴兵猶予停止、学徒出陣の始まり、徴兵適齢の一年引下げ、いわゆる「横浜事件」のでっちあげ、新聞の夕刊廃止、旅行制限の強化、国民学校初等科児童の集団疎開決定、砂糖の家庭用配給停止、国民総武装の決定と竹槍訓練の実施、学徒勤労令・女子挺身勤労令の公布、台湾にも徴兵制強行、等々。こうした情勢を念頭に置いた上で、河上日記を読んで感動させられるのは、その目配りと心寄せが、実にこまごまと行き届いていることである。当局の監視の目が光っており、絶対の自由は許されていないとは言え、獄中と比べれば、まさに霄壤（しょうじょう）の差である娑婆世界へ出て、あたかも獄中で過ごした時間の空白をとりもどそうとするかのように、河上は日記の内容を濃密にしてゆく。その結果、これは河上自身でなければ書けない自分史であると同時に、河上の燃犀な史観に裏づけされた比類を見ない現代世界史ともなった。…日常茶飯や身辺些事を、細大もらさず何くれとなく書きとどめていることに、正直でてらいのない河上の滋味ゆたかな人間性の発露を見出し、そこにユニークなこの日記の価値づけをする読者も多いであろう。しかし、全巻を読み通して、ずっしりと重く読者の胸にせまってくるのは、日本の未曾有の危機に際し、微動だにもせぬ信念を持ち続けたこの筆者の強靭な史観であろう。それは、戦局に対する痛烈な批判ともなれば、伊藤証信と矢内原忠雄の時事発言を対比させての裁決ともなり、寸毫も節をまげなかった河上のすがすがしい健在ぶりの表白でもある」（壽岳文章「解題」『河上肇全集』第23巻、1983、pp. 727-78、p. 734.）。

⑶　文章が発行した雑誌に短命に終わった『みおつくし』があるが、社会、時代に文章がどのように向き合ったかが、そのタイトル（道標）からしてよく理解できる。文学史家は的確にその意義を伝えている。「それにしても『みおつくし』誌上に掲げられた、寿岳文章の「ブレイクとその時代」にしても、深瀬基寛の「T. E. Hulmeの反人本主義」にしても、矢野峰人の「『上田敏詩集』を読みて」にしても、嵐のように揺れる時代のなかで、おのれに執し、おのれの肉声を静かに語った文章であ

る。「みおつくし」には一般のジャーナリズムには左右されぬと言う姿勢が貫かれていた。市場にも出さぬ、番号こそ記していないが、「限定版の高貴性」は持ち続けていく、という構えがあった。「心ある読者の眷顧と支持」のみで結構、という考えである。

しかしこの「みおつくし」の寿岳文章の文などを読んでいると、時代のけわしさに安易に向きあうよりも、『ブレイクとホキツトマン』の「限定版の高貴性」、或いは手づくりの発表意慾、手づくりの発表誌（本）の大切さ、その持続性に学ぶところあり、と思った。寿岳は末尾に、［あえて頭文字を大文字にして］

> I must Creat a System, or be enslayv'd by another Man's;
> I will not Reason and Compare: my business is to Create.

というブレイクの言葉［*Jerusalem*］を掲げ、さらに「仏蘭西革命の直後、しばらくの間ではあったが、Blake は英国最初の革命的労働団体である“倫敦通信協会”員 Thomas Holcroft その他と交友した。The French Revolution はこの時代の作品である」と記している。『みおつくし』には、カットがわりにブレイクの絵も挿入されていた」（紅野敏郎「ぐろりあ　そさえての『みおつくし』」『雑誌探索』朝日書林、1992年、pp. 261-62.）。

(24) 文章は和紙を史的な関連でもって調査するのを生涯の仕事にしていたが、この正倉院における和紙の総合的な調査は文章の和紙研究のなかでエポックメーキングな研究であったと結論づけてもよかろう。「これらの舶載品は、当然わが国の文化に、有形無形の深い影響を与えた。工芸的な技術に例をとれば、乾漆や平脱や、夾纈や絞纈や蔫纈など、支配階級者の意をうけて、直ちにわが国の工人たちによって試行され、ほどなく完成の域に達したに違いない。紙は中国で発明され、第一次遣唐使が渡海した頃は、すでに発明後五百年以上の歳月を閲しているから、抄造や加工の技術も著しく進歩していたことは、これもまた正倉院宝物中の唐土の紙が如実に告げる。一方、わが国へは、朝鮮半島を経由して、七世紀の初めすでに製紙の技術が伝えられており、戸籍の作成その他実用に供されていた。正倉院文書には、唐製の紙と無関係に抄造された日本風の紙も数多く残されている。これら二系統の紙は、天平期に烈しいインパクトを示す。その様相の能うかぎりの究明が、われわれ調査員に課せられた任務なのである」（寿岳文章「総説」『正倉院の紙』日本経済新聞社、昭和45年、p. 7.）。

「紙は、金石と違って保存条件がよくない限り、あとかたもなく亡びてしまうものであるから、古墳の出土品中にその痕跡を求めることは不可能であるとしても、す

でに早く二・三世紀の交、海彼の地で紙を知り、紙を持ち帰った日本人があったと想像するのは、決して荒唐無稽の推定ではない。また、漢民族の植民地として久しく栄えていた朝鮮半島の楽浪・帯方両郡地域が、四世紀の初頭、中国本土の内乱と高勾麗の勃興によって荒廃に帰した直後、高勾麗・百済・新羅三国の勢力の消長は目まぐるしく、その影響で、爾来およそ三百五十年にわたり、漢・秦・朝鮮系民族の日本へのおびただしい流入・帰化があったことは、『新撰姓氏録』を一覧してもわかる。私見では、曇徴の来朝以前、すでに日本で紙を作った者がいたとすれば、おそらくこれらの帰化人たちの中に求められると思う。それについての詳しい考証は、吉川弘文館発行の日本歴史叢書の一冊、小著『日本の紙』に譲るが、結論を言えば、曇徴をもって日本における彩色・紙・墨の創始者とは見なさず、それらの工芸的技術に長じていたマスター・クラフツマンと解するのが、書紀の正しい読みかたではあるまいか」（寿岳文章「正倉院の紙の文化史的所見」『正倉院の紙』日本経済新聞社、昭和45年、pp. 9-10.）。

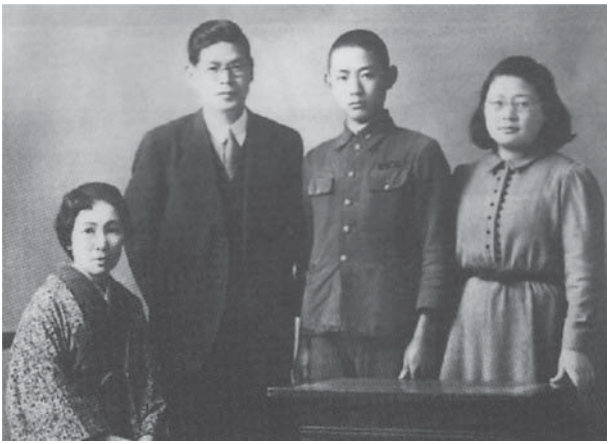
「このように大量に消費される紙は、―墨や筆も同様であるが―諸国に命じて生産にあたらせ、正税をもって買いあげるか、原料を貢進させて中央政庁の図書寮で製造させるか、あるいは写書所の役人が市場から購入するか、三つの方法で調達されたと思われる。成紙や製紙材料の貢進を命じられた国は、伊賀、参河、上総、武蔵、近江、美濃、信濃、上野、下野、越前、越中、佐渡、但馬、丹後、伯耆、播磨、長門、周防、紀伊、阿波、美作、出雲など多数であるが、宝亀五年度におけるそれらの国々からの未進紙は、実に15,650張にものぼった。これを裏返せば、おびただしい数量の紙が生産されていた証拠である。それら諸国の紙はもちろん、遠くまた古く隋・唐渡来の紙を蔵する正倉院は、紙だけについて見ても、文字通りの世界の宝庫と言わねばならない」（寿岳文章「正倉院の紙の文化史的所見」『正倉院の紙』日本経済新聞社、昭和45年、p. 45.）。

研究や学問が特権的な位置にあるのではなく、個人の努力の延長上にあるというこの認識は、専門による学問の細分化がすすむ今日でも新鮮にうつる。「この程度でも専門家あつかいされるということは、だれにもそうした可能性がある証拠じゃないでしょうか」という壽岳の言葉には先生の強い自負をおぼえる。

「**寿岳**　実は今、吉川弘文館の「日本歴史叢書」に入る『日本の紙』の索引を作っているんですが、少々口幅ったい言い方ですけれど、私が英文学のいろんな問題に注いだのに劣らぬ熱情と学問的良心をこれに打ちこんだつもりなんです。そのほか、今年の 3 月末までに正倉院の紙の研究をまとめて、研究の結果を本にいたします。この調子では、どうやら和紙の研究の専門家の一人に私もなっていくようですね。

福田　ほんとうにそうですね。

寿岳　そこでね、福田さんにも聞いていただきたいと思うんですけど、人間はみなそれぞれの可能性をもっているのですから、その可能性の開発に少しエネルギーを集中すると、どの方面であっても好きこそものの上手なれで、好きな気持さえあればかなりのとこまで行けるんじゃないでしょうか。書誌学にしても和紙の研究にしても、私は決してわきめもふらずにやってきたわけではないのですが、この程度でも専門家あつかいされるということは、だれにもそうした可能性がある証拠じゃないでしょうか。これは、どの学問についても言えることではないかと思います」（福田陸太郎「学問と人生と美の探究者―壽岳文章」『さまざまな出会い―対談・鼎談・会見記―』中教出版、昭和62年、p. 66.）。



壽岳文章一家

研究者紹介（執筆順）

安　西　敏　三（甲南大学名誉教授）

中　島　俊　郎（甲南大学文学部教授）

2018年（平成30年）1月30日　発行

甲南大学総合研究所

神戸市東灘区岡本8丁目9番1号　（〒658-8501）

（非売品）